

# 博 多 89

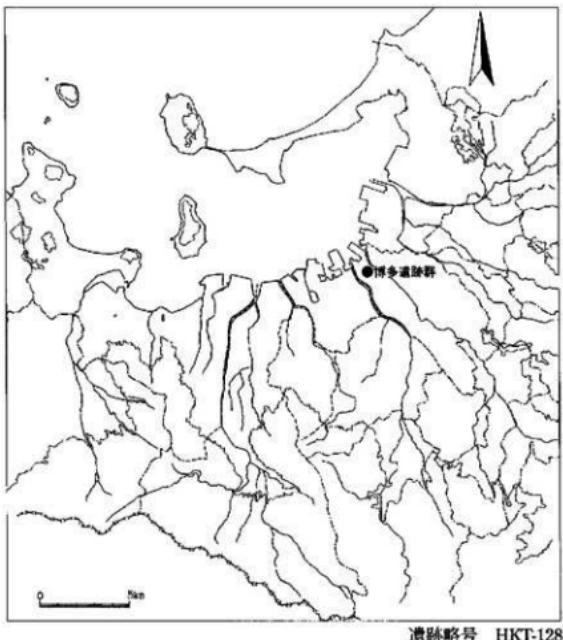
—博多遺跡群第128次調査報告—

2003

福岡市教育委員会

# 博 多 89

—博多遺跡群第128次調査報告—



2003

福岡市教育委員会

# 序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する博多遺跡群第128次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで福岡市水道局をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 牛田 征生

## 例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成12年度に博多区博多駅前1丁目360番地内において実施した博多遺跡群第128次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、坂本真一が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲三、撫養久美子、小田裕樹が行った。また石塔銘文の判読については、文化財整備課三木隆行氏の御教示を受けた。
4. 製図は長家、撫養、濱石正子、古澤義久が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物（S B）、上坑（S K）、溝（S D）、井戸（S E）、ピット（S P）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	0058		遺跡略号	I K T - 128	
所在地	博多区博多駅前1丁目360番地内		分布地図番号	36-0121	
開発面積	365m <sup>2</sup>	調査対象面積	365m <sup>2</sup>	調査面積	307m <sup>2</sup>
調査期間	平成13年1月15日～平成13年2月28日		事前審査番号	12-1-27	

## 本文目次

I	はじめに	4
1	調査にいたる経過	4
2	調査体制	4
II	調査の記録	8
1	調査概要	8
2	遺構と遺物	8
1)	掘立柱建物	8
2)	溝	22
3)	井戸	26
4)	土坑	41
5)	その他の遺物	51

## 挿図目次

第1図	調査区位置図 1 (1/25000)	5
第2図	調査区位置図 2 (1/4000)	6
第3図	調査区位置図 3 (1/500)	7
第4図	調査区全体図 (1/100)	9
第5図	S B003実測図 (1/80)	11
第6図	S B003出土遺物実測図 1 (15は1/5、その他は1/3)	15
第7図	S B003出土遺物実測図 2 (1/3)	16
第8図	S B003出土遺物実測図 3 (1/3)	17
第9図	S B003出土遺物実測図 4 (1/3)	18
第10図	S B003出土遺物実測図 5 (1/3)	19
第11図	S D022、023、027、029、031、036、040、042 実測図 (平面1/120、断面1/40)	20
第12図	S D022、023出土遺物実測図 (1/3)	23
第13図	S D029出土遺物実測図 (1/3)	24
第14図	S D031、036、040出土遺物実測図 (1/3)	25
第15図	S E001、010実測図 (1/40)	26
第16図	S E001出土遺物実測図 1 (1/3)	28
第17図	S E001出土遺物実測図 2 (154・155は1/4、その他は1/3)	29
第18図	S E001出土遺物実測図 3 (1/5)	31
第19図	S E001出土遺物実測図 4 (1/5)	33
第20図	S E010出土遺物実測図 1 (1/3)	35
第21図	S E010出土遺物実測図 2 (1/3)	36
第22図	S E002、008実測図 (1/40)	37
第23図	S E002出土遺物実測図 1 (190・191は1/2、その他は1/3)	38
第24図	S E002出土遺物実測図 2 (1/3)	39

第25図	S E 046実測図 (1/40) .....	40
第26図	S E 046出土遺物実測図 (232は1/2、その他は1/3) .....	40
第27図	S K 011、012、013、014実測図 (1/40) .....	42
第28図	S K 012、013、014出土遺物実測図 (1/3) .....	43
第29図	S K 016、017、018実測図 (1/40) .....	44
第30図	S K 018出土遺物実測図 (1/3) .....	45
第31図	S K 020及び出土遺物実測図 (1/30、1/3) .....	46
第32図	S K 021、030実測図及びS K 021出土遺物実測図 (1/40、1/3) .....	47
第33図	S K 034及び出土遺物実測図 (1/30、1/3) .....	48
第34図	S K 039及び出土遺物実測図 (1/40、1/3) .....	49
第35図	S K 043、044、045、118実測図 (1/40) .....	50
第36図	S K 043、044出土遺物実測図 (1/3) .....	51
第37図	その他の出土遺物実測図 (1/3) .....	51

## 写真目次

写真1	調査区より北側を望む (中央は承天禪寺).....	4
写真2	調査区全景 (東から) .....	10
写真3	調査区全景 (北東から) .....	10
写真4	S B 003 (東から) .....	13
写真5	S B 003 (北東から) .....	13
写真6	S B 003内004 (北東から) .....	14
写真7	S B 003内004西側部分 (南西から) .....	14
写真8	S B 003内005、007 (南から) .....	14
写真9	S B 003内S D 024、025 (南東から) .....	14
写真10	S D 036周辺 (北から) .....	21
写真11	S D 036 (東から) .....	21
写真12	S D 023、029土層 .....	21
写真13	S D 022土層 .....	21
写真14	S D 031土層 .....	21
写真15	S D 036土層 .....	21
写真16	S E 001 (北から) .....	27
写真17	S E 001水流め (南から) .....	27
写真18	S E 010 (北から) .....	27
写真19	S E 010井筒 (北から) .....	27
写真20	S E 002、008 (東から) .....	36
写真21	S E 002、008上層 .....	36
写真22	S E 046 (東から) .....	40
写真23	S K 012、014 (北から) .....	42
写真24	S K 013上層 .....	42
写真25	S K 013 (西から) .....	42
写真26	S K 018 (東から) .....	44
写真27	S K 020 (南から) .....	46
写真28	S K 020上層 .....	46
写真29	S K 021上層 .....	47
写真30	S K 030上層 .....	47
写真31	S K 034 (北西から) .....	48
写真32	S K 043 (東から) .....	50

# I は じ め に

## 1 調査にいたる経過

平成12年5月18日付け水總第234号により、福岡市水道局総務部經理課長から教育委員会埋蔵文化財課長宛に福岡市博多区博多駅前1丁目360番地内の福岡市水道局新館建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号12-1-27）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群（分布地図番号36-0121・遺跡略号HKT）に含まれている地点である。申請者と協議の上平成12年6月21日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から145cmほどで砂丘面に至り柱穴等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い（教埋169号 平成12年6月23日）、その取り扱いについて協議を行うこととした。協議の結果庁舎建設部分については遺構の破壊が避けられないため、平成12年度に発掘調査、平成14年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成13年1月15日～平成13年2月28日である（調査番号0058）。なお発掘調査は庁舎建設部分のみを対象として行うこととした。調査面積は307m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ47箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては水道局をはじめとして関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多くなご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

## 2 調査体制

事業主体 福岡市水道局

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治（前任）田中寿夫（現任）

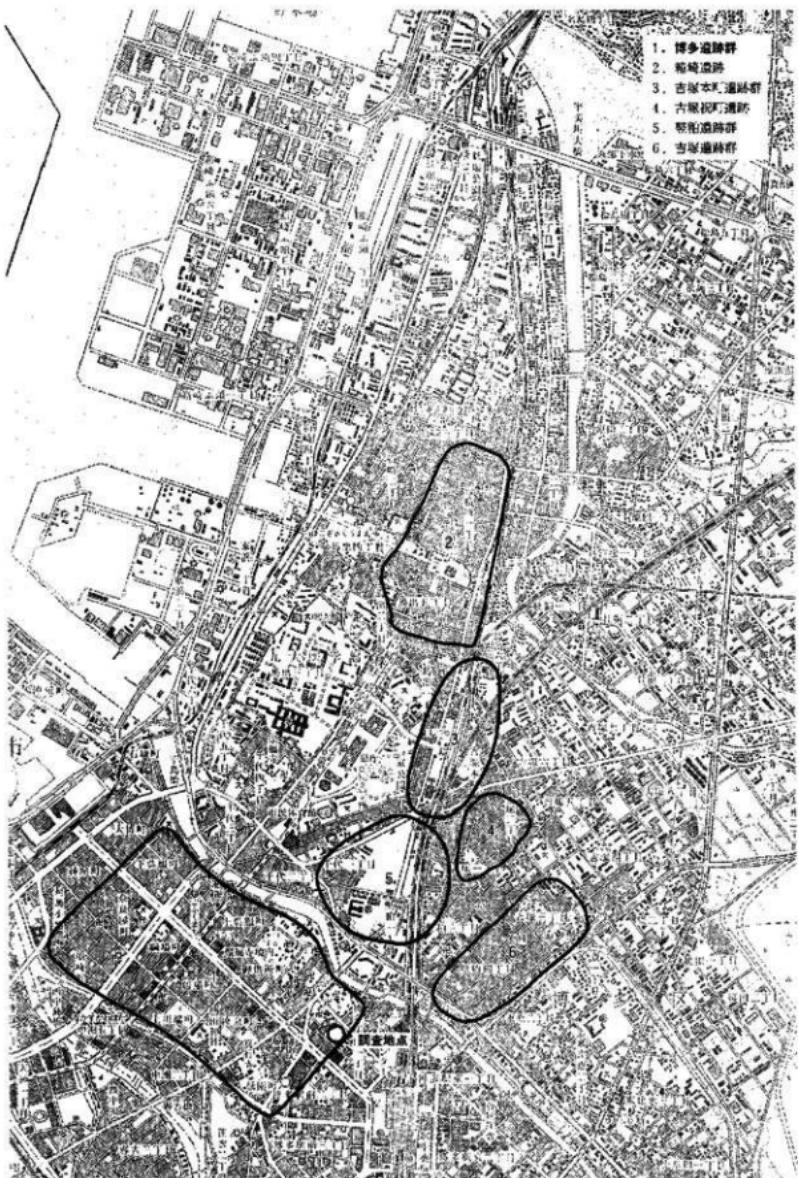
調査庶務 文化財整備課 御手洗清

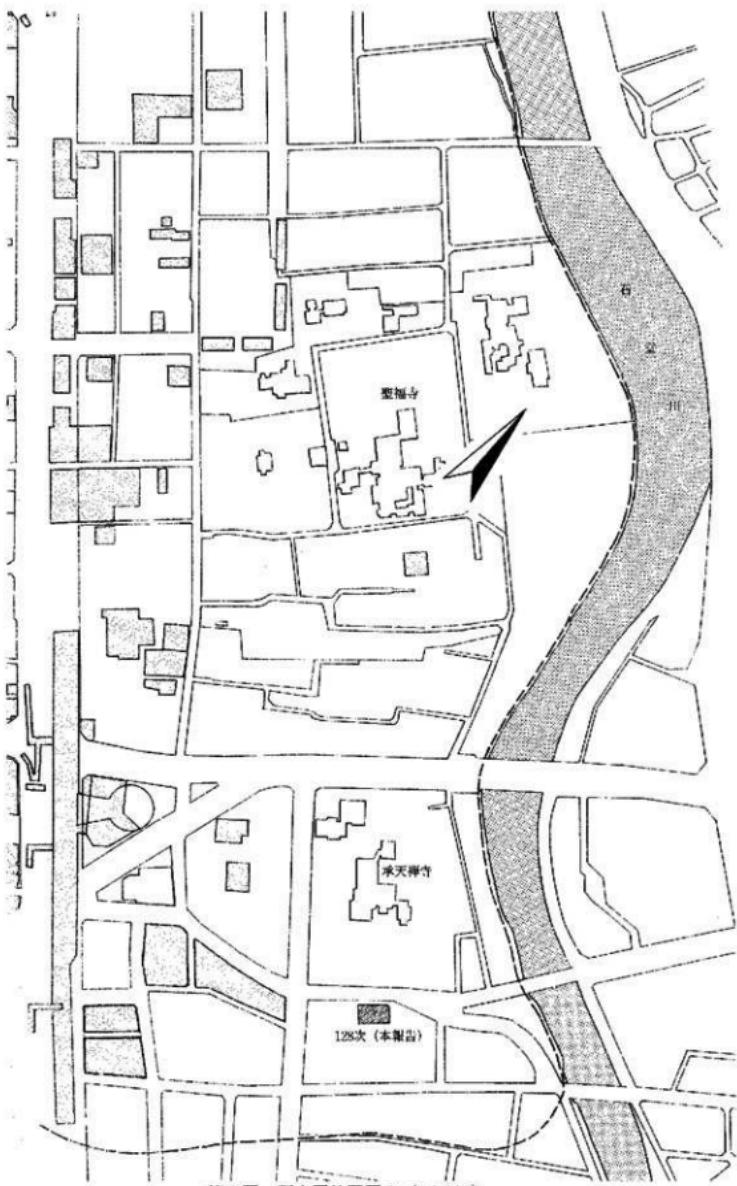
調査担当 調査第2係 長家伸

なお調査・整理作業には多くの方々にご協力を頂いた。ここで感謝の意を表したい。

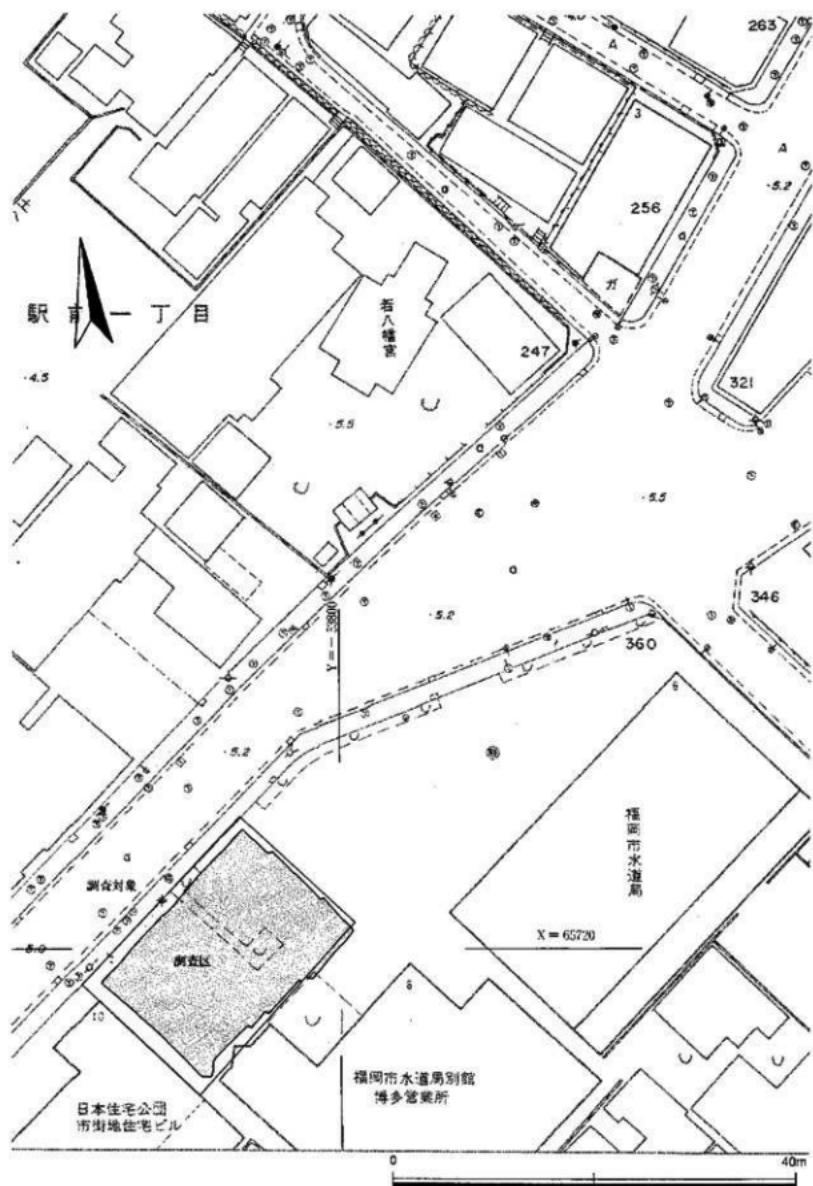


写真1 調査区より北側を望む（中央は承天寺）





第2図 調査区位置図2 (1/4000)



第3図 調査区位置図3 (1/500)

## II 調査の記録

### 1 調査概要

申請地は博多遺跡群の南東隅にあたり、北側には承天禪寺が位置している。現水道局が位置する地点は以前の旧博多駅のホーム東端部分にあたっている。調査は行舎建設部分のみを対象として行った。周辺の調査事例によれば、対象地南側の水道局庁舎部分ではすでに地山砂丘面が後背地に向かって急傾斜しており、砂丘の末端部分に位置している。

調査は道路及び民地に面する北西側と南西側2方向に鋼矢板を埋設したのち、重機による表土除去を行った。対象地は現地表面から1.3m程度までは大きく擾乱を受けており、これを除去した標高3.8m前後で地山の砂丘面が一帯露出したためこの面を遺構面として調査を開始した。遺構面上には擾乱も多く残されており、これを除去する段階で遺構面上に傾斜も生じているが、現状ではほぼ平坦である。また地山の砂丘面は黄白色風成砂で比較的しまりのない砂丘砂である。

検出遺構は掘立柱建物、溝、井戸、上坑のほかピット多数である。遺構は中世に位置付けられるものが大半を占める。中世前半代は井戸、土坑、中世後半代は大型の掘立柱建物、井戸、上坑等を検出している。近世以降の遺構については前述の博多駅建設・解体時に失われているものと考えられ、ほとんど遺存しておらず、遺物の出土も少量である。また古代以前の遺構・遺物も少量である。その他出土遺物の特徴としては、中世の遺構・遺物が主体を占めるが、中でも土師器壊・皿類・土師質土器が中心となり、陶磁器の出土量は相対的に少ない。特に中世前半代に位置付けられる白磁・青磁類が少ないという特徴を有する。中世後半代の遺構に特徴的な遺物として瓦類と、石塔類がある。井戸・建物から出土している。石塔類には禅宗関連銘及び紀年銘資料も含まれている。15世紀中頃～16世紀後半の間で考えられる大型の建物（S B003）は北側に隣接する承天禪寺との関連が考えられる。また極少量であるが弥生時代中期初頭に位置付けられる遺物破片が出土している。本調査区内では直接遺構に伴うものではないが、該期の遺構が砂丘末端部分にまで広がる可能性が考えられる。また古式土師器・古墳時代後期及び古代に位置付けられる土師器・須恵器の出土も見られる。古墳時代後期～古代の遺物は一定量を占めており、明確な遺構もこの時期以降認められるようになる。

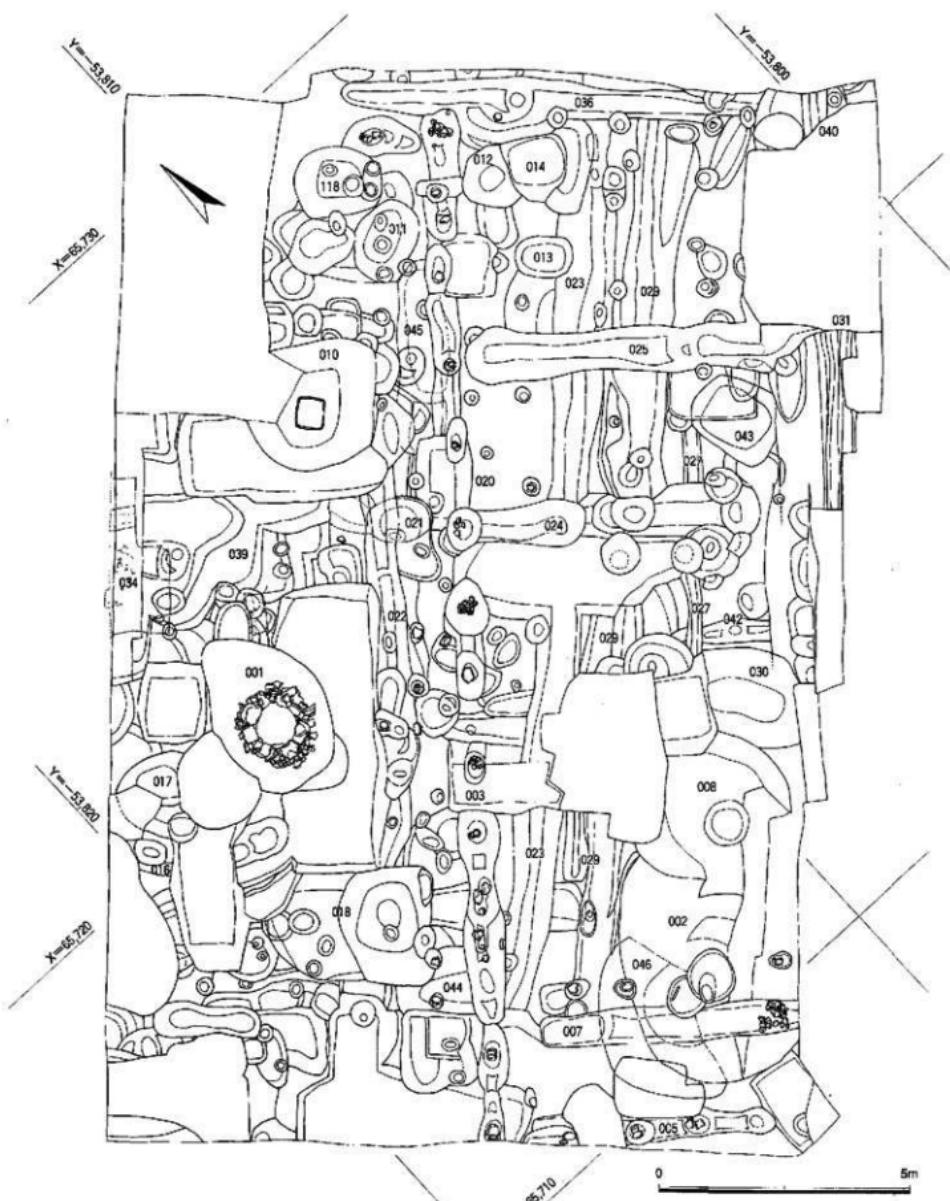
本調査地点では弥生時代・古墳時代・古代の遺物は認められるものの遺構数は少なく、周辺の博多浜上における調査事例とは状況を異にしている。砂丘縁部分の状況であるのか、本調査地点に限られる状況であるのかは明らかではないが、博多浜南東端部分の状況として注目される。

### 2 遺構と遺物

#### 1) 掘立柱建物（S B）

##### S B 003（第5図）

調査区ほぼ全面に展開する掘立柱建物である。なお建物はS B 003とするがこれを構成する遺構についてはそれぞれ別番号を付しておらず説明もこれにしたがって行う。北西側桁行は布掘りを行い(004)各柱位置には根石を投入している。柱間は1.5mを基本とし狭い部分で1.3m、広い部分で1.8mを測る。確認した布掘りは13間：20mである。埋土は上層灰褐色砂質土、下半は暗褐色砂である。主軸方位はN-46°-Eとなる。南西側は布掘り005が梁行にあたると考えられるが、北東側桁行が明らかでなく更に北東方向に桁が延びる可能性が高い。梁行005は004より掘り込みは浅いが、基本的に根石が据えられている。柱間1.3～1.5mを測る。梁方向は後述する S D 024・025との関連から4間：5.2mで収まる可能性も考えられるが、004に対応する南東側桁が確認できていないため、梁行きは更



第4図 調査区全体図 (1/100)

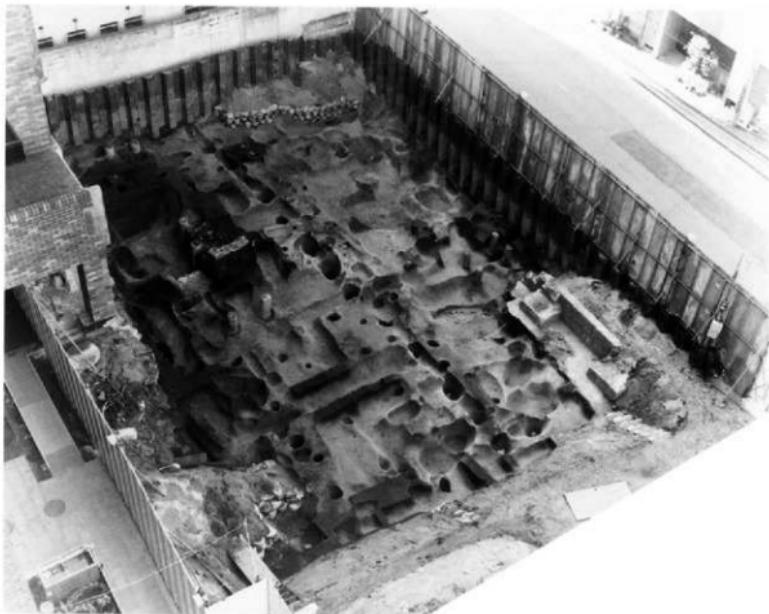
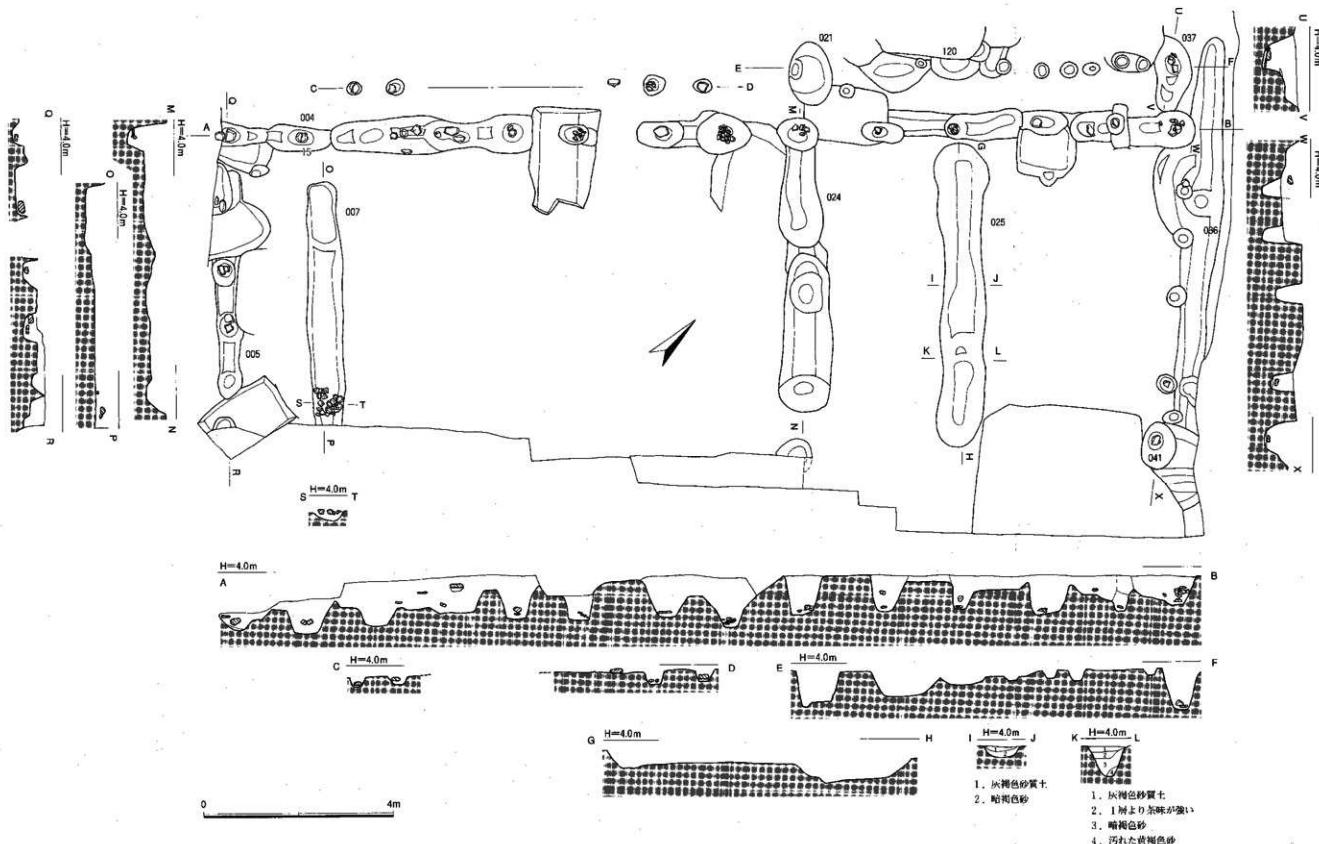


写真2 調査区全景（東から）



写真3 調査区全景（北東から）



第5図 S B003実測図 (1/80)

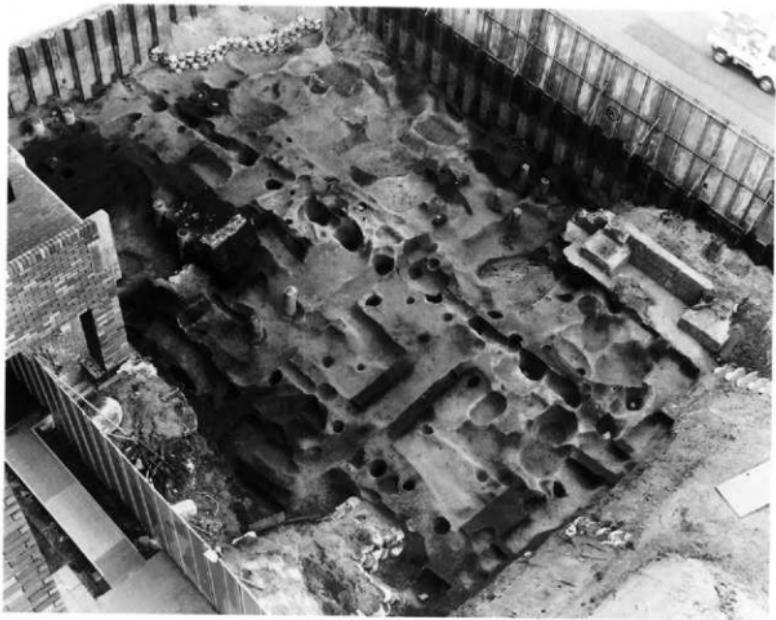


写真4 SB003(東から)



写真5 SB003(北東から)



写真6 SB003内004（北東から）



写真7 SB003内004西側部分（南西から）



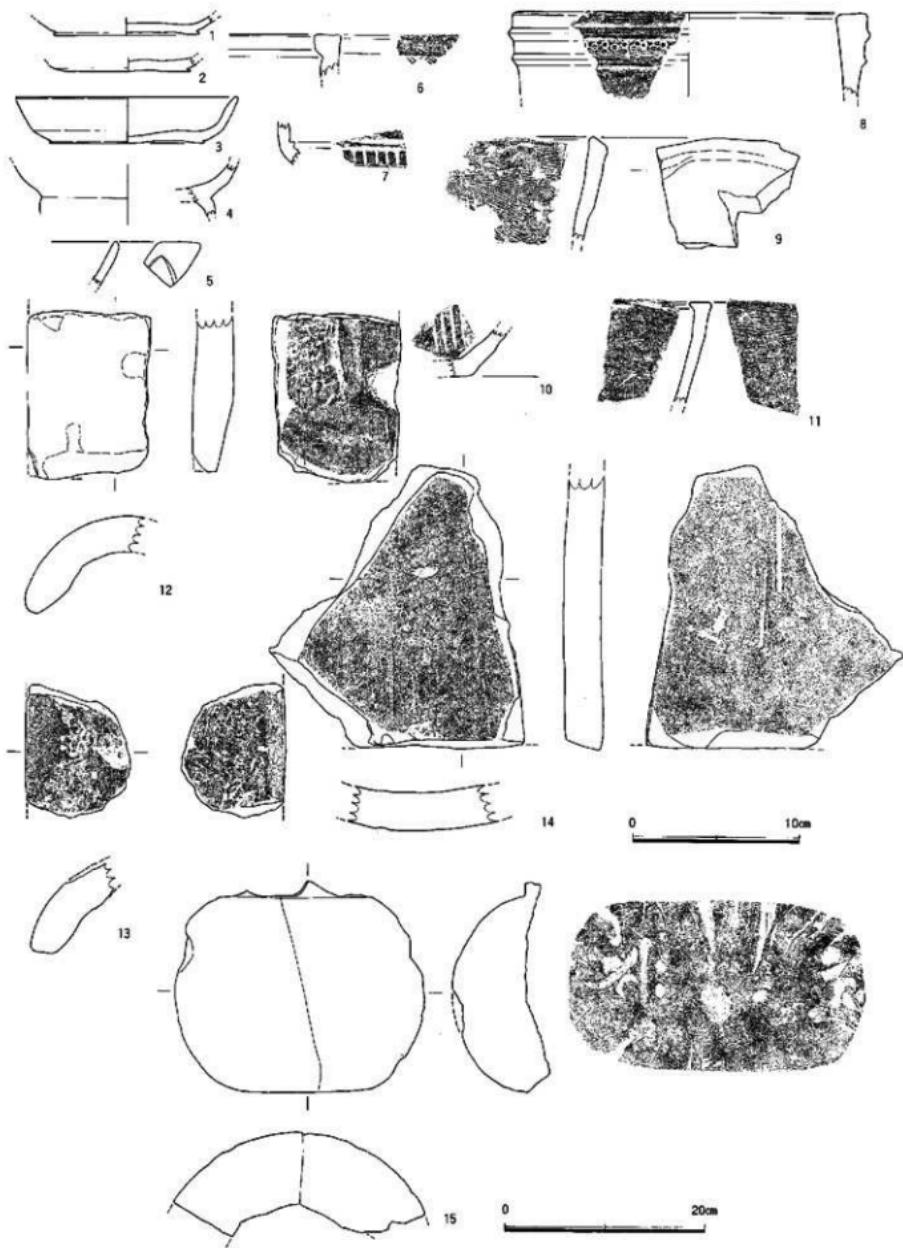
写真8 SB003内005、007（南から）



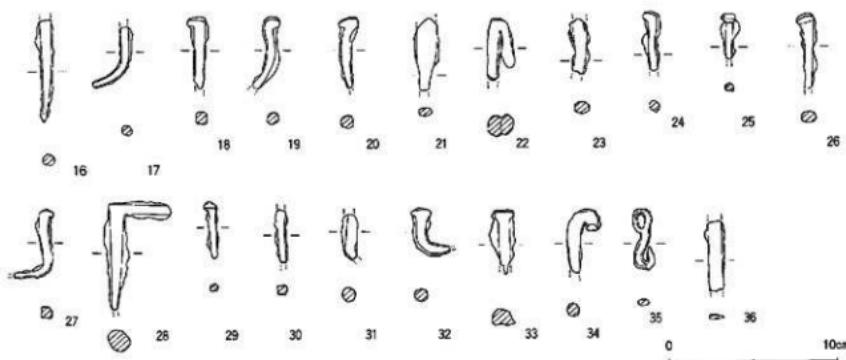
写真9 SB003内SD024、025（南東から）

に南東側へ延び、5間以上：6.5m以上となる可能性が高い。SD007・024・025は掘削位置や方位から建物に関連する掘り込みであろうと考えられる。間仕切り状の施設を示すとも考えられるが、溝内には根石、柱掘り込み等はほとんど確認できていない。SD007は埋土が灰褐色砂質土で幅70cm、断面浅皿状を呈する。SD024は004の柱掘り方から掘削を始めている。長さ5.5m、幅1m前後を測る。埋土は暗褐色砂で他の関連造構と比べ埋土が異なっている。また出土遺物をみるとSD024からは瓦が出土しておらずやや異なる遺物組成を示す。SD025もSD024同様、004柱掘り方位置を基準にして、SD024に並行に掘削されている。長さ6.4m、幅1mを測る。埋土は上層灰褐色砂質土、下半は暗褐色砂である。

更に南東側に延びるSD031・040も主軸方位を同じくするもので関連も考えられるが周辺に搅乱もあり明らかでない。また004の北西側には庇状の柱列、雨落ち溝状の溝（SD022）がある。庇状の柱列は1m前面の数個の根石列と、SP037より延びる1.4m前面のピット列である。いずれも明瞭な形で確認できておらず可能性の指摘に留めておきたい。SD022についても部分的なものにとどまる様であり、明確な対応関係はつかめていない。



第6図 SB003出土遺物実測図1 (15は1/5、その他は1/3)



第7図 SB003出土遺物実測図2 (1/3)

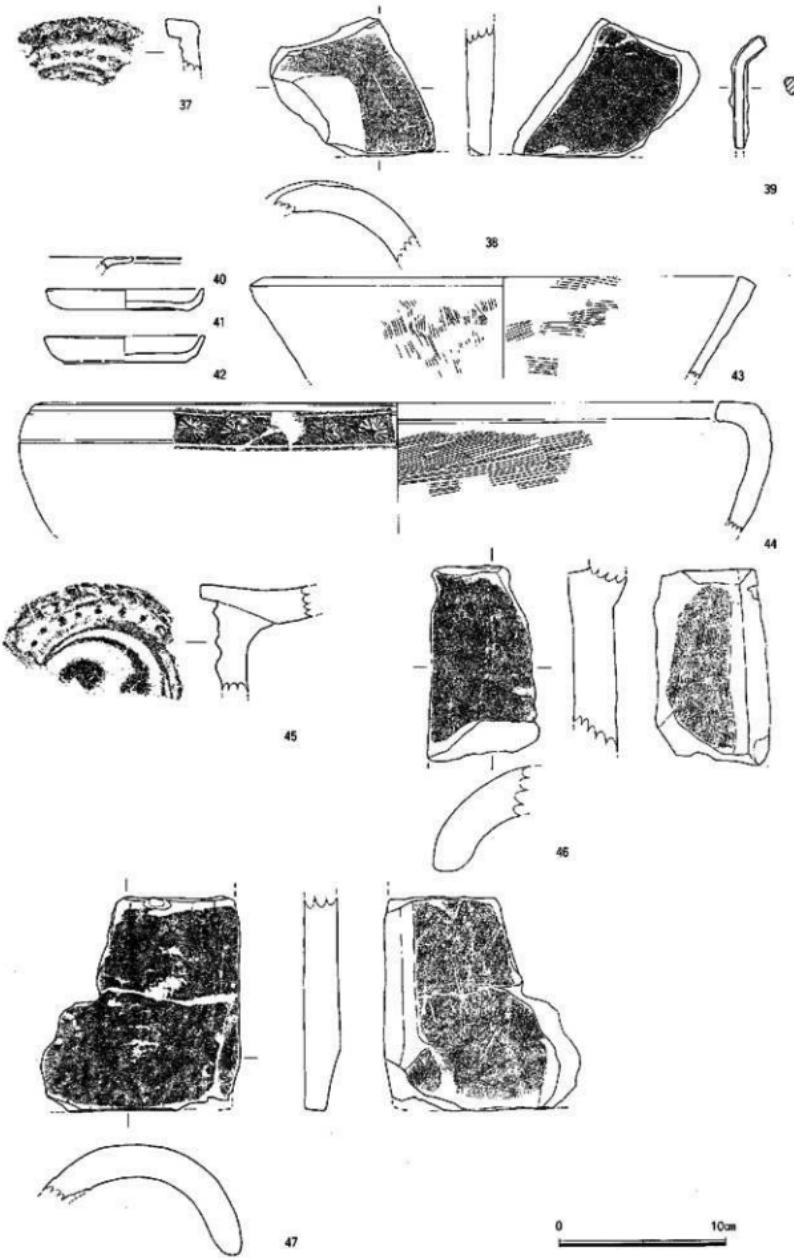
建物規模が大きいこと、調査区に制限があること、遺構が多く閑連部分のピックアップが困難であることなどから明確な規模・構造は明らかにしえないが、004・005を建物軸・梁行きとし、SD 011・024・025を建物に伴う溝状遺構として考えておきたい。現状で13間×4間(20m×5.2m)を測るが、軸行は北東方向、梁行は南東方向に更に広がる可能性が高い。

また調査区北東端でSD 036に並行するピット列を4間: 5.5m検出した。位置的にSB 003の梁行となる可能性も考えたが、主軸方位が異なる(N: 40°—W) もでの別の建物柱列であろうか。

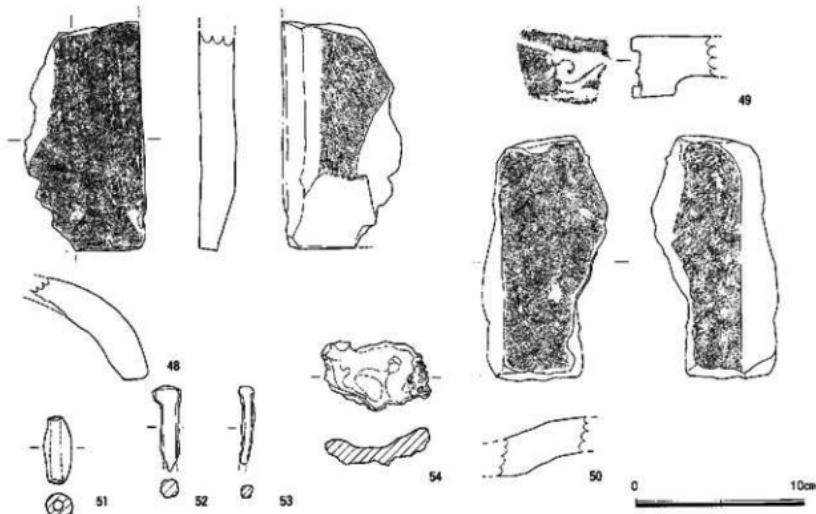
出土遺物は土師器壺・皿・瓦が主体を占め、白磁・青磁・染付が少量出土している。また004の根石中に石塔の転用品が認められる。石塔類の出土はこの他の遺構ではSE 001に上体的に見られ、時期的な近接も考えられる。良好な遺物が少ないため類推による部分も多いが、SE 001出土石塔に永享年銘(1429~1440)がある事や、SD 025出土染付(64)等から15世紀中頃~16世紀後半の時期幅の中で考えておきたい。建物位置・規模・時期・主軸方位等から承天禪寺に閑連する建物と考えられるが、絵画・文献資料に対応するものは知られていない。

出土遺物(第6~10図) 1~36は布掘り004出土遺物である。1~4は土師器である。1~3は外底面糸切りの壺・皿である。4は高台付椀である。5は蓮弁を有する青磁碗である。6~11は瓦質上器である。6~8は外面にスタンプを押印する。9は插鉢である。10は須恵質の插鉢。11は土師質の插鉢である。12・13は丸瓦である。共に縦痕及び布日が残る。凸面は縦方向にナデを行う。14は須恵質の平瓦である。凹凸両面共に縦方向のナデを行う。15は根石に転用された石塔部品の半欠品である。内部は中空に削り込んでいる。外面にサク(勢至菩薩)、キリーグ(阿弥陀如来)を模彫りする。16~36は鉄製品である。16~35は鉄釘と考えられる。大半の頭部は潰れている。身部はほぼ真直ぐなままのもの。矩形に折れ曲がるもの、ほぼ180°折り返されるものなどがある。35は両端部の形状より本米釘であると考えられるが両端部を弧状に折り返し、「8」字状に成形している。本来頭部の部分も潰れておらず、当初より転用して用いたものであろう。36は片刃の刀子であろうか。残存長5.4cm、刃幅1cmを測る。

37~39は005出土である。37は巴文の軒丸瓦である。38は焼しを行う丸瓦である。凹面には布日、凸面には縦目が残る。39は鉄釘である。



第8図 SB003出土遺物実測図3 (1/3)



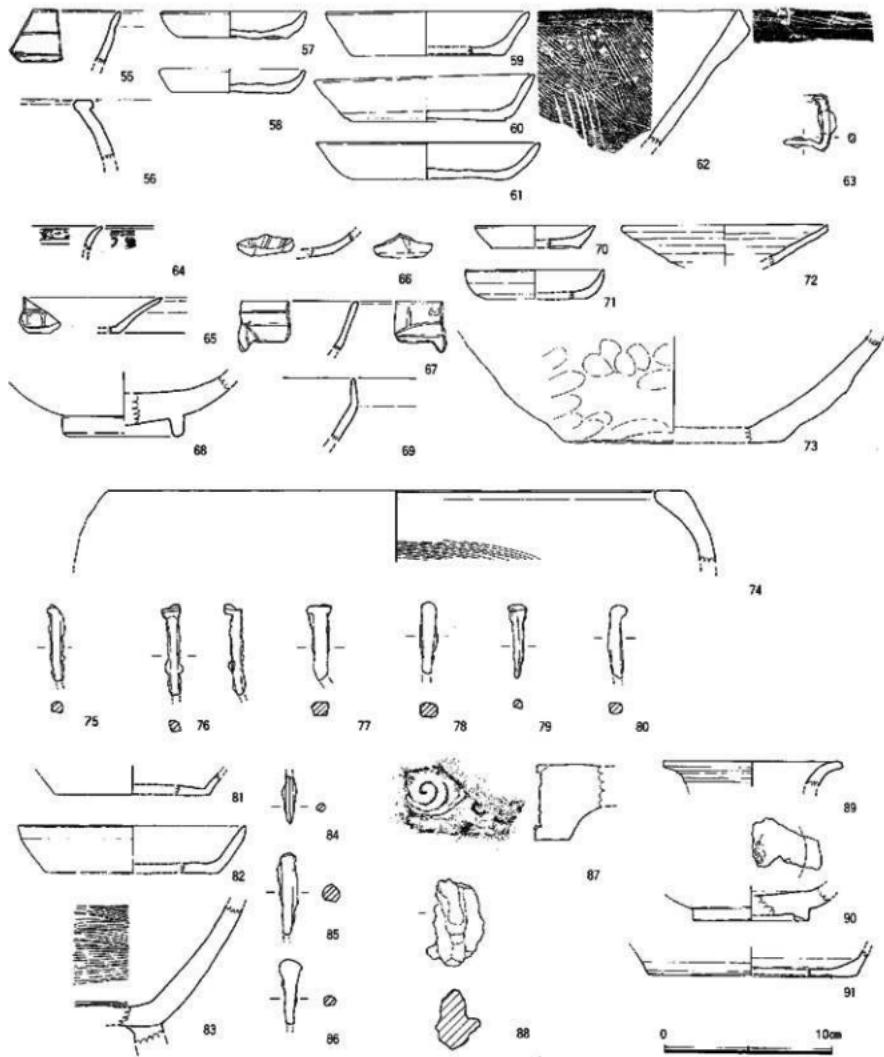
第9図 SB003出土遺物実測図4 (1/3)

40~54はS D007出土である。40は口折の青磁皿口縁部である。41・42は糸切りの土師皿である。43は土師質の鉢で外面縦刷毛、内面横刷毛を行う。44は瓦質火鉢である。外面に花文をスタンプする。45は巴文の軒丸瓦である。46~48は丸瓦である。46は焼成軟質の玉縁式で、凸面は縦目の後ナデを行う。47は軟質で凸面は縦目の後ヘラ状の工具で縦方向にナデを行う。48は焼しを行う。49は外縁部の広い軒平瓦である。唐草文を配する。50は袴瓦であろう。51は一部を欠く土錘である。52・53は頭部の潰れた鉄釘である。54は暗紫色を呈するガラス質滓である。

55~63はS D024出土遺物である。55は釉調オリーブ灰色を呈する。淡部は僅かに外反気味である。内面に横方向の園線及び花文が施される。56は陶器壺破片である。57~61は外底糸切りを行う土師器である。62は瓦質の擂鉢。63は丸形に折れ曲がる完存品の鉄釘である。

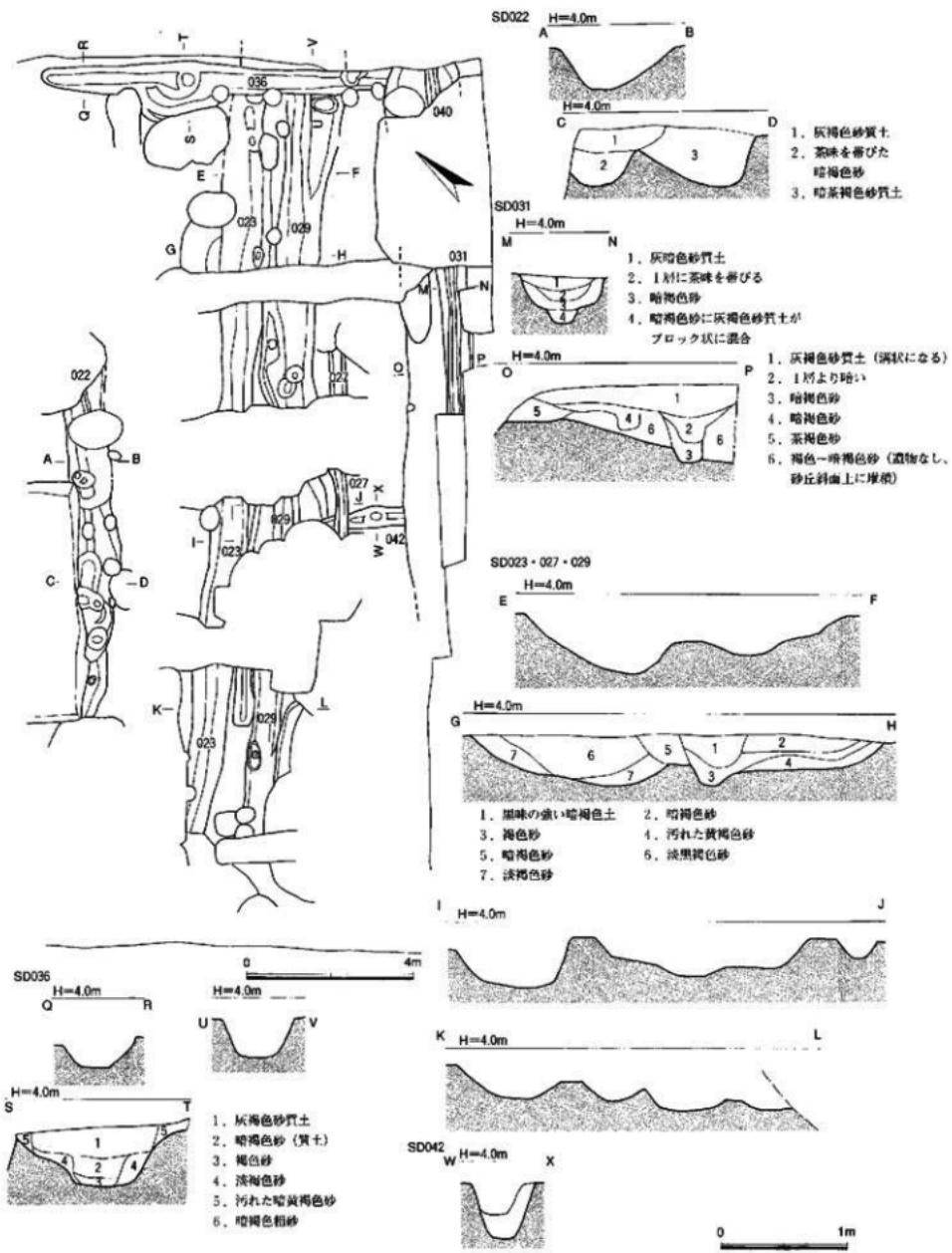
64~80はS D025出土である。64は明代の染付である。端反りの小碗もしくは皿である。内面四方禪文、外面牡丹唐草文を施す。小片で形態に不明な点もあるがSB004の下限を示す資料であると考えられる。65は口禪白磁皿である。内面に蓮弁状の施文が行われる。66~68は青磁である。66は内外面に片彫りを行う。67は刻花による雷文帯を行する碗である。68は粗製の碗である。高台外面～盤付きまで施釉される。69は大目の碗である。70・71は外底面糸切りの土師器皿。72はロクロ口を明瞭に残す大内系の土師器坏である。浅黄褐色を呈し直線的に体部が開く。73は鉢底部である。外面に指頭痕跡が多く残る。74は瓦質の火鉢である。75~80は鋳化の著しい鉄釘である。

81~91は関連が考えられるピット出土遺物であるが、遺構の説明でも述べた通り建物との関連については必ずしも明確ではない。81~86はSP037出土である。81は青白磁の皿である。82は糸切りの土師器坏である。83は脚を付す瓦質の鉢である。胴部～底部内面に横刷毛を行う。84~86は鉄釘である。87・88はSP041出土である。87は唐草文を配する軒平瓦である。88は鍛冶滓である。上面にメ



第10図 SB 003出土遺物実測図 5 (1/3)

タルが付着する。89~91はSP120出土である。89は青磁壺破片である。90は青磁碗である。高台外面まで施釉し、見込みにはスタンプによる文様が施される。91は糸切りの土師器壺である。胎土に砂粒を比較的多く含む。



第11図 SD022, 023, 027, 029, 031, 036, 040, 042 実測図 (平面1/120、断面1/40)



写真10 S D036周辺（北から）



写真11 S D036（東から）



写真12 S D023、029上層



写真13 S D022上層（C-D）



写真14 S D031土層（O-P）



写真15 S D036上層（S-T）

## 2) 溝 (S D)

調査区内では複数の溝状遺構を確認している。主軸方位・埋土から S B004に伴う可能性を有するものもあるが、不明瞭な点もあり溝としてここで報告するものもある。(S D022・027・031・040等) また S D036のように埋土・遺物からは類似性が認められるものの、方位が異なり別遺構と考えられるものもある。

### S D022 (第11図)

S B003の北側に位置し、建物主軸方向と傾斜する溝である。主軸方位は N-46°-Eである。埋土は S B003布振り004と同様である。S B003前面全体に延びておらず、北東側では確認できていないなど、建物との関連については不明である。出土遺物には陶磁器・土師器・土質質土器、瓦質土器、瓦、鉄釘、青銅製品等がある。S B003出土遺物に比べ瓦類の出土が非常に少ない。組成上の相違があり時期的に先行するものであろうか。

**出土遺物** (第12図 92~97) 92は口禿げの白磁皿である。93は平底の天日碗である。94は国産陶器の甕口縁部である。95は瓦質の脚付き火鉢である。外面にスタンプの渦文を施し、内面全面に横刷毛が残る。96は青銅製の飾り金具であろうか。97は鉄釘が皆しが鉄釘であろう。

### S D023 (第11図)

調査区中央で検出する。S B004を構成する遺構に切られており、これに先行する溝である。後述する S D029とほぼ並行して延びる。土層から S D023→S D029の関係となる。埋土は暗褐色砂である。溝幅1m前後で検出面からの深さ20~50cmを測る。溝底はほぼ平坦であるが北東側がやや低くなる。出土遺物は土師器壺・皿が主体で陶磁器・瓦は極少量である。青磁皿(98)によれば15世紀中頃~16世紀前半を中心とした時期に位置付けられるが、この溝を切る S D029は出土遺物から14世紀代に考えられ、青磁皿(98)は混入の可能性もある。

**出土遺物** (第12図 98~101) 98は青磁種花の皿である。端部内面に文様を刻む。99は瓦質土器である。火鉢であろうか。外面に菊花文をスタンプする。破片部分は注口状にやや歪んでいる。100・101は鉄釘である。

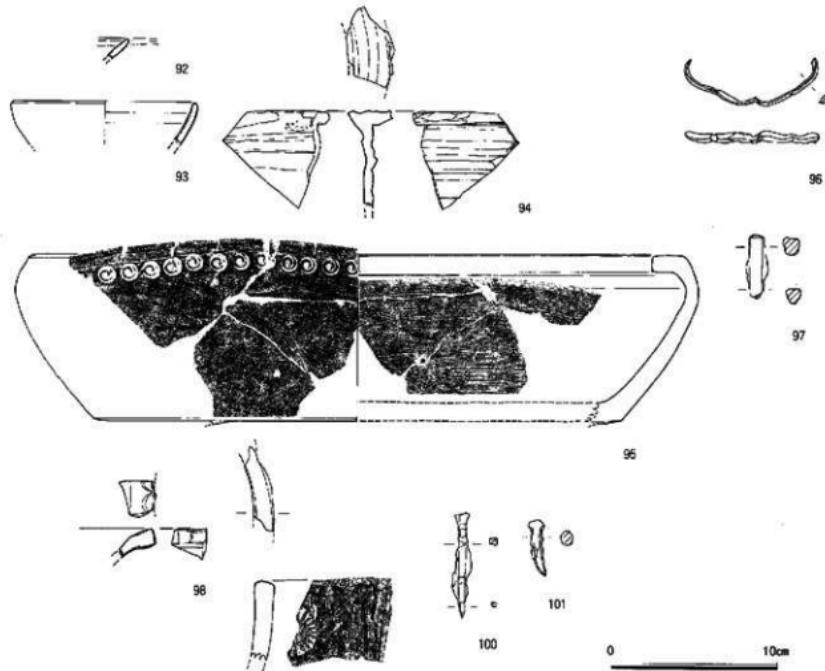
### S D027 (第11図)

S D025の西側で検出する。確認長は5m程度である。主軸方位は N-44°-Eで S B003にはほぼ並行する。溝幅30~40cm、深さ15cm前後を測る。埋土は褐色砂である。S D042→S D027→S K028の関係となる。遺物は小片数点の出土である。

### S D029 (第11図)

調査区中央で検出する。S D023を切り、これに並行して延びる溝である。溝幅1.6mを測り、底面には部分的に平坦面を有する。埋土は暗褐色砂が主体となり、上坑との切り合いが不明瞭な部分が多い。出土遺物は陶磁器・瓦の出土が少なく、土師器が主体を占める。また古墳時代後期~古代の土師器・須恵器が S D024を挟んだ周辺埋土から多く出土している。この部分に該期の遺構が存在する可能性もある。

**出土遺物** (第13図) 102~104は土師器である。102は外底面糸切りの皿で口縁端部に煤が付着する。103・104も外底面糸切りを行う。105・106は口禿げの白磁である。107は皿である。青磁か白磁かは不明である。残存部全面に施釉している。108は天日碗である。109は陶器鉢である。110・111は鉢の注口部分破片である。110は内外面に刷毛目が残り、111は内外面横ナデによる。112は丸瓦である。凸面は繩目の後縫方向のナデ、凹面には布目が残る。113・114は滑石製の石鏟である。共に鋸が巡るタイプである。115・116は鉄釘である。117はやや扁平で小型ノミ状の工具の可能性もある。118は幅



第12図 SD 022、023出土遺物実測図 (1/3)

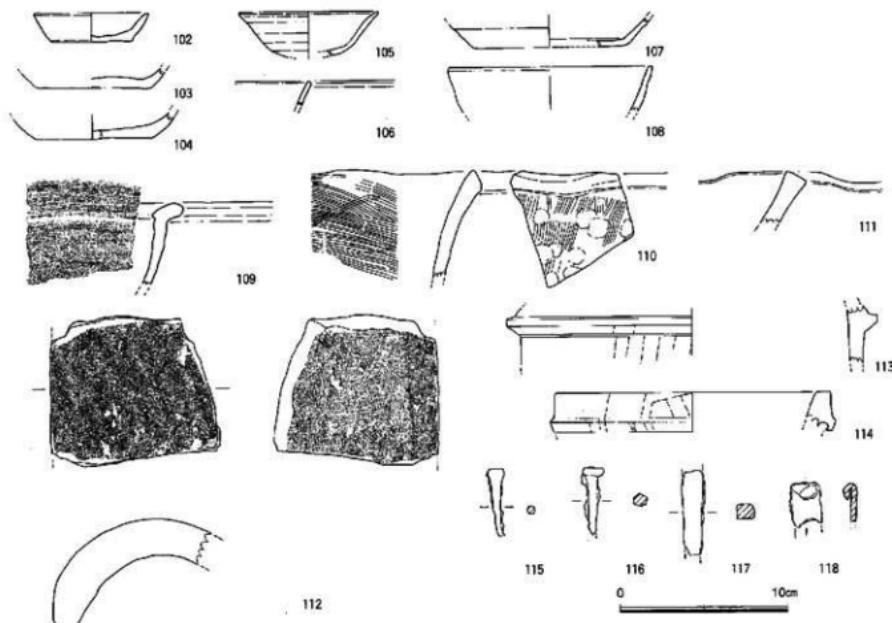
1.7cm、厚さ3mmを測り、端部を折り戻している。不明鉄製品である。

#### S D 031・040 (第11図)

調査区北東側で検出する。S B 003の主軸方向にほぼ並行する溝である。溝幅は2m程度を測り、上段が浅皿状に掘削され、その底面から更に幅40cm、深さ40cmの箱型に掘り下げている。埋土は上層灰褐色砂質土、下半が暗褐色砂で建物に伴う一連の造構と同じ埋土である。またこの溝の掘削位置は地山砂丘面が後背地に向かって傾斜をはじめており、砂丘上に載った褐色砂上面から掘り込まれている。現状ではここから出土遺物はなく褐色砂の堆積時期は不明である。また040としたものは調査区際部分でSD 031上面に堆積している暗灰色砂質土から川上した遺物で、SD 031との関連については不明である。遺物の大半は上面出土で、瓦が主体を占め、青磁・白磁が少量出土する。溝埋没後に堆積したものであろう。溝本来の埋土中からの遺物は極少量で時期は不明である。

**出土遺物 (第14図 119~129)** 119~123はSD 031部分出土、124~129はSD 040部分出土である。119は外面に灰オリーブ色釉がかかる壺の肩部破片である。国産であろうか。120は両面を畳す平瓦である。121~123は鉄釘である。122は比較的の遺存状況が良好な完存品で、現状で長さ6.6cm、身部径4mmを測る。身部先端は四面から整形して尖らせ、頭部は円形に整形している。

124は国産染付である。125は白磁、126は青磁である。127は瓦質土器である。口縁部外面に波状の



第13図 S D 029出土遺物実測図 (1/3)

施が行われる。128は丸瓦である。凸面縦目の後縦方向のナデを行い、凹面には布目が残る。129は素文磚である。2次的に焼成を受け、煤が付着する。

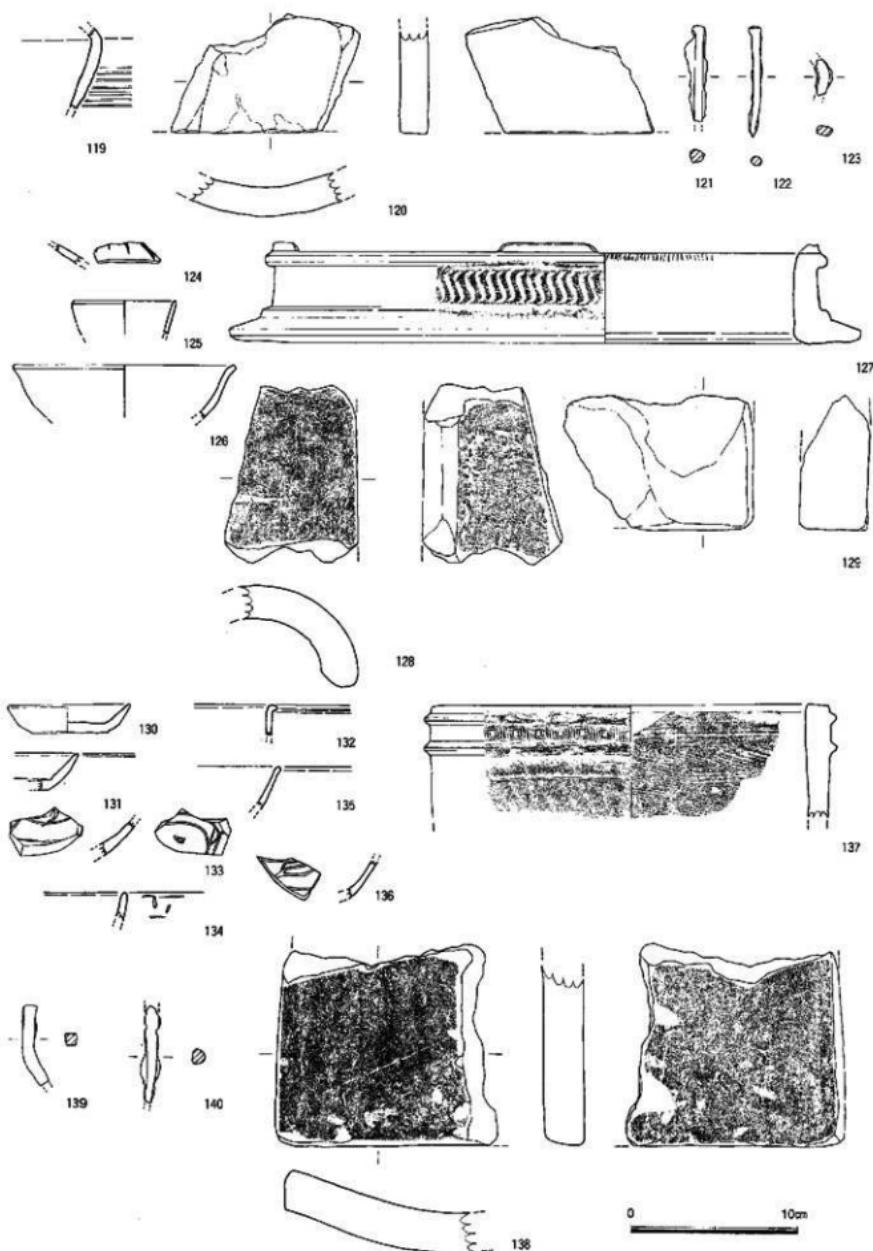
#### S D 036 (第11図)

調査区北東端で検出する。主軸方位はN—40°—Wをはかり、S B 004と若干方位を異にする。平面的にはS B 003に伴う布掘り004に切られている。埋土は上層灰褐色土、下層暗褐色砂である。またS D 036に並行するピット列を4間: 5.5m検出しているが(第5図参照)、S B 003とは主軸方位が異なるもので別の建物柱列と考えられる。位置的な関連からS D 036はこの柱列と関連する構造であろう。出土遺物は瓦、土器器が多く、陶磁器類が少量である。雷文帯青磁碗やS B 004との切り合い等から14世紀中頃～15世紀後半の中で考えておきたい。

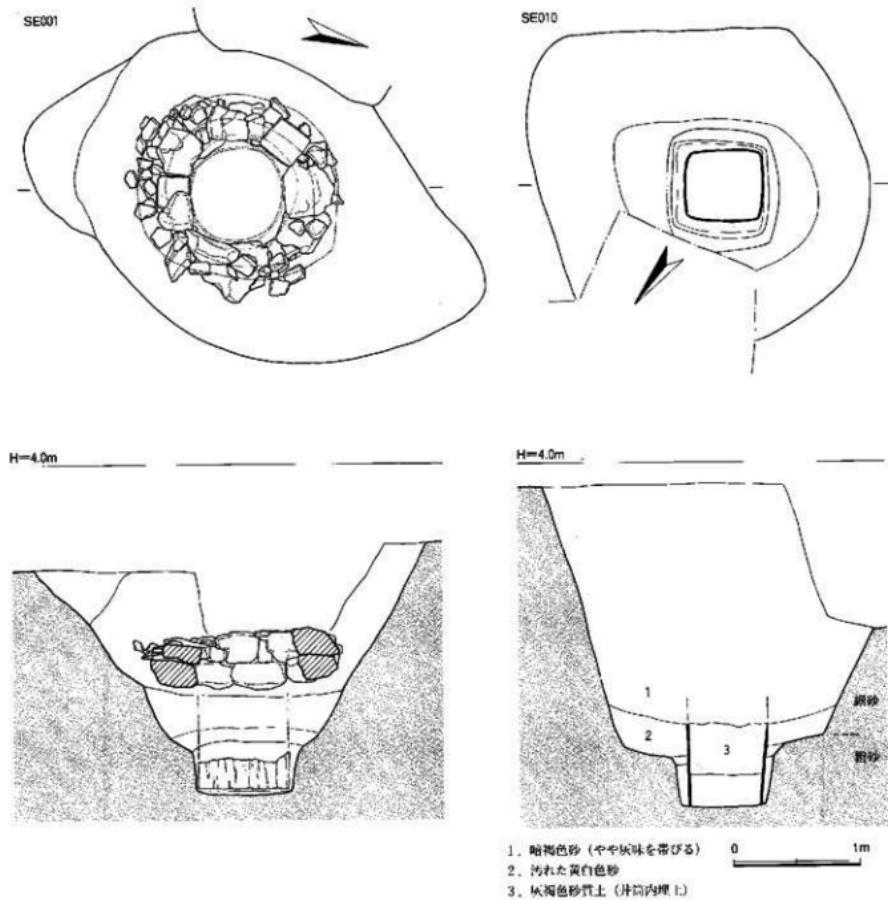
**出土遺物 (第14図 130～140)** 130は土器器皿である。外底面糸切りで板状压痕を有する。131は口禿げ白磁皿である。132～136は青磁碗である。132は口縁端部を外方に折り返している。133・134は雷文帯を刻んでいる。135は無文で端部をやや外方に肥厚させる。136は内面に花文を刻む。137は瓦質の火鉢である。外面にスタンプ文を有し、内面は横方向の刷毛目を残す。138は平瓦である。凹凸面ナデ調整である。139・140は鉄釘である。

#### S D 042 (第11図)

調査区北東側で検出する。S D 027、S K 028に切られる。幅40～50cm、検出面からの深さは20～40



第14图 S D 031、036、040出土遗物实测图 (1/3)



第15図 S E 001、010実測図 (1/40)

cmである。埋土は暗褐色砂である。図示し得る遺物はないが、陶器、土師器破片、鉄滓等が出土している。

### 3) 井戸 (S E)

井戸は全てで5基確認している。S B 003に先行するS E 002・008・046とこれらの3基に後出のS E 001・010である。

#### S E 001 (第15図)

調査区西側で検出する。掘り方は平面形3.8×2.5mの長円形を呈する。掘り方やや南寄りに石組みの井戸枠を確認した。40cm角の自然石や石塔軸用品等を用いており、現状では石組みは2段残ってい



写真16 SE001（北から）



写真17 SE001水溜め（南から）



写真18 SE010（北から）



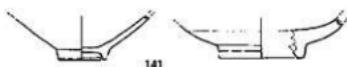
写真19 SE010井筒（北から）

る。井筒内埋土から多くの石材が出土しており、本来的には上面まで石組みが行われたものであろう。石組みの下位には径70cmの桶組み井筒が据えられている。遺存状態は不良であり、井戸底部付近で痕跡を確認するのみである。埋土は石組み確認面までは暗褐色砂質土、石組み以下の掘り方埋土は淡黒褐色砂主体、井戸枠内は暗灰色土である。上層部分では井戸枠の痕跡は認められず、井戸の使用停止に伴った井戸枠の破壊行為が行われたのであろうか。出土遺物の大半は瓦・磚類である。また石組みに用いられた石塔類が多く出土する。その他陶磁器・土師器類が少量出土している。石塔の紀年銘資料などから構築は15世紀中頃以降と考えられ、石塔の出土する遺構が限られることながらSB003に近似した時期に作られた井戸と考えられる。なお井戸枠内から近世陶磁器が少量出土しており、近世前半代まで井戸枠が残っていたものと考えられる。

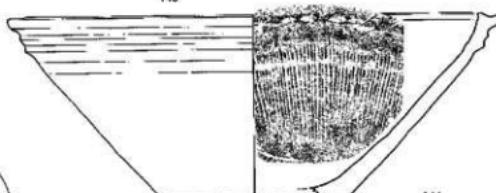
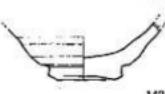
**出土遺物（第16～19図）** 141～144は石組み内～井筒出土、145～148は石組みの裏込め土出土、149～155は石組み検出面までの掘り方出土、156～169は石組みに転用された石塔である。

141は国産磁器碗である。142は国産天目碗である。143は国産陶器碗である。内面に緑色釉が部分的に付着する。144は陶器擂鉢である。

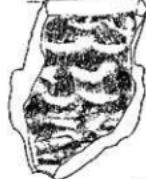
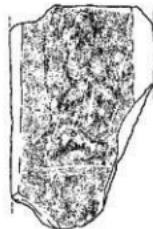
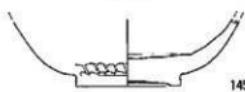
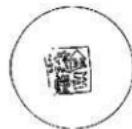
145は龍泉窯系青磁碗である。内底に「金玉満堂」のスタンプを有する。146・147は丸瓦である。



143



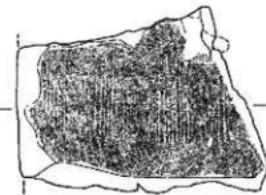
144



147



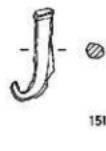
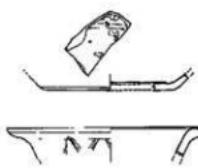
146



148



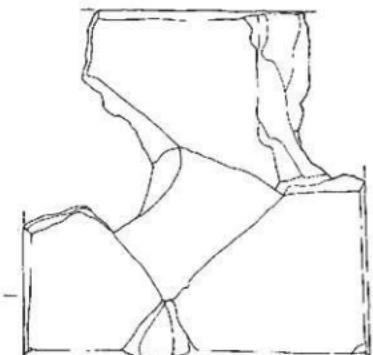
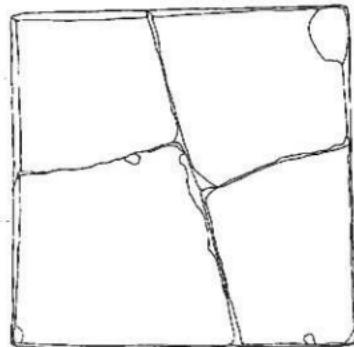
第16図 S E001出土遺物実測図1 (1/3)



151



0 10cm



0 10cm

第17図 SE 001出土遺物実測図2 (154・155は1/4、その他は1/3)

146は両側面が残存する。凸面縄日の後ナデ、凹面には布目が残る。147は玉縁式である。凹面にうろこ状の吊り紐痕が残る。148は平瓦である。凸面はナデ、凹面は縦方向に刷毛目状の調整を行う。

149は青磁皿である。残存部全面に施釉する。150はL字折の青磁皿である。外面に交叉工具により蓮弁を施す。151は先端部を鉤形に折り曲げる鉄釘である。152・153は丸瓦である。152は土縁式で凹面に吊り紐痕を残す。153は凸面縄日の後ナデを行い、凹面布目と吊り紐痕が残る。154・155は素文磚である。154は略完形品で4.85kgを測る。

156～163は五輪塔である。156～158は火輪、159・160は水輪、161～163は地輪である。石質は160、161以外は花崗岩製である。161は砂岩製で一文字欠失した紀年銘が残る「保二年 戊」と読め、該当する年号をたどると1318年（文保2年 戊午年）に推定できる。

164～169は宝篋印塔である。164～166は塔身、167～169は基礎である。石質はいずれも砂岩であり、花崗岩が主体となる五輪塔の石質とは差異が認められる。塔身としたものには人石あるいは梵字が刻まれる。164は「キリーク」（阿弥陀如来）、166には「キャカラバア」の梵字が刻まれ、165には人名と考えられる「枯海宗憲」銘が残されている。167・168には押宗園連の職名と考えられる「座元」（首座の意）、「書記」が刻まれる。また169の紀年「永享」年は1429～1440年にあたり、「己未」と読めれば1439年（永享11年）となる。

#### S E 010（第15図）

S E 001の北東側に位置する。掘り方は平面2.6mの略方形を呈する。掘り方底面中央に一辺80cmの方形の掘り込みを行いこの部分に木製井筒を据えている。井筒は幅20cm程度の横板を方形に組み合わせており、内法で50～55cmの方形に作られている。井筒は底面から70cm程しか確認できず、この上層部分では井筒痕跡は認められなかった。井筒の破壊が行われたものであろう。埋土は検出面～井筒検出面までは灰味を帯びた暗褐色砂、井筒検出以下の掘り方は汚れた黄白色砂、井筒内は灰褐色砂質土である。S E 001のような石組みの痕跡はない。出土遺物の大半は瓦で陶磁器・土師器類は極少量である。またS E 001で特徴的に認められた石塔類・磚の出土はない。出土遺物からは中世末～近世初期が考えられる。

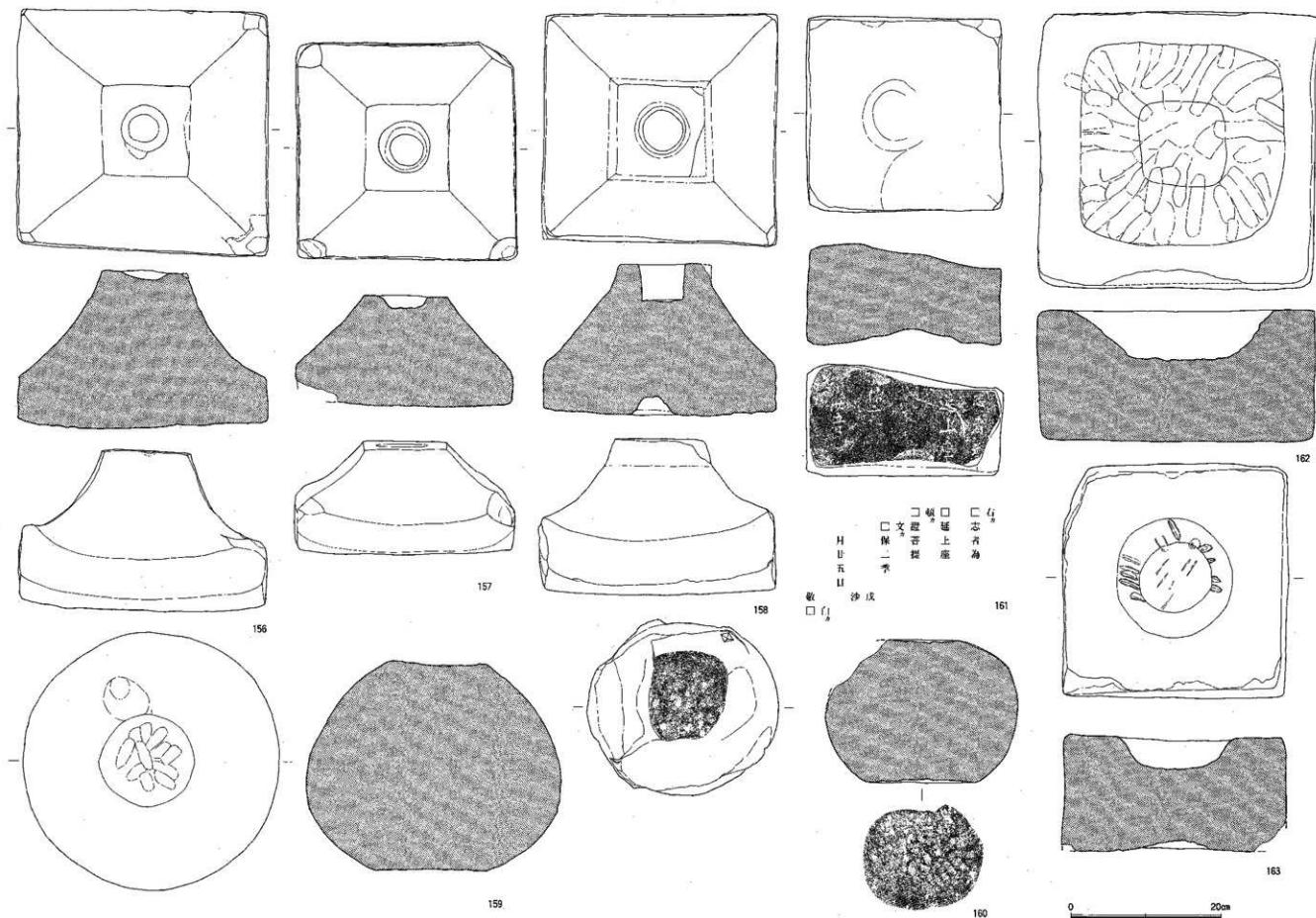
**出土遺物（第20・21図）** 170は青磁縫花皿である。内面に文様を刻む。171は天目碗である。172は陶器鉢である。173は陶器壺である。174は瓦質の擂鉢である。175～178は瓦質火鉢である。175～177はそれぞれ異なるスタンプ文を外面に行っている。179は焼しを行なう棧瓦である。180は巴文の軒丸瓦である。181～184は丸瓦である。いずれも凹面には布目と吊り紐痕が残る。また181・183には凸面に縦痕が認められる。185は錫胎彫りしているが、鉄釘であろう。

#### S E 002（第22図）

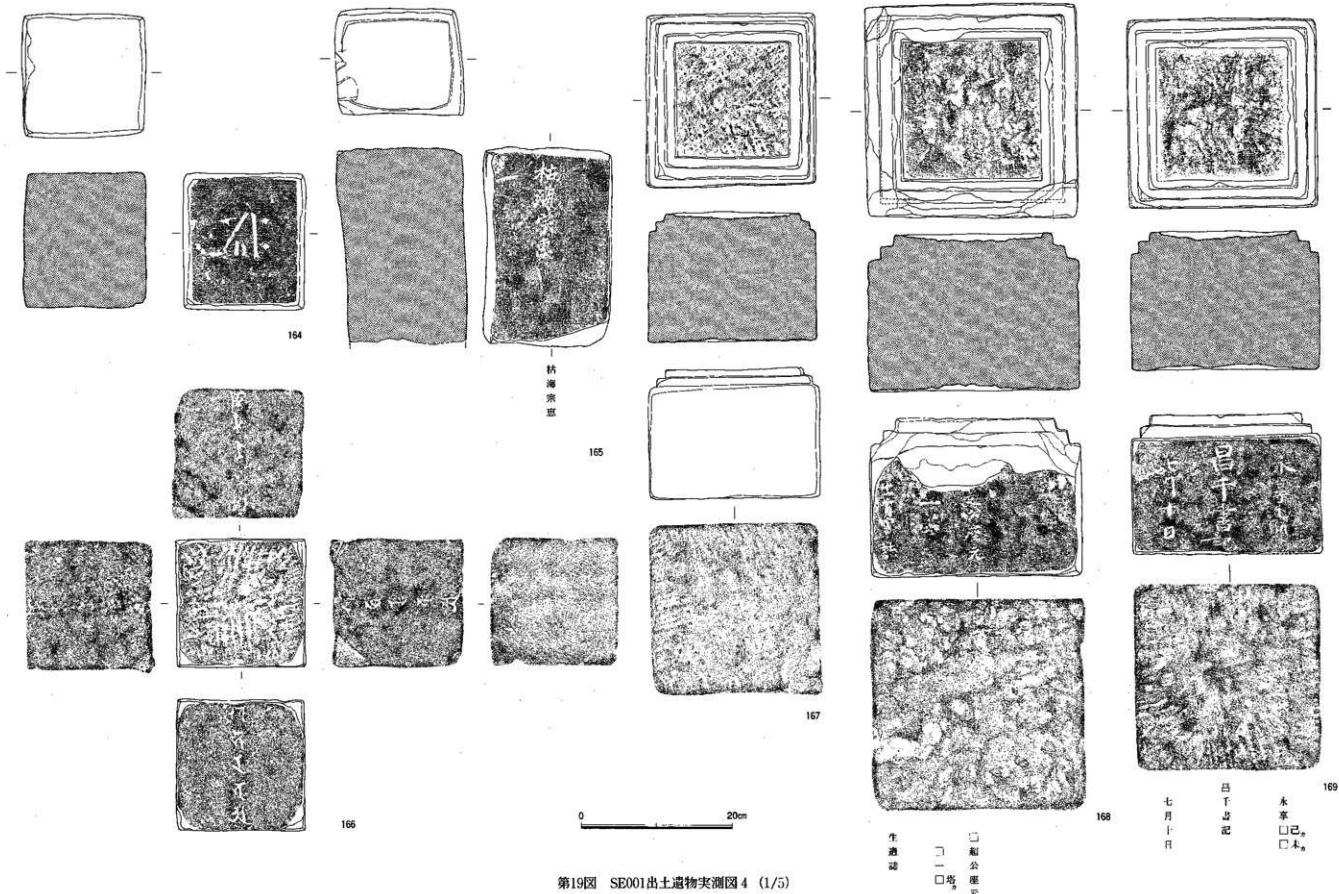
調査区南隅で確認する。S E 008・046→S E 002→S B 003の関係となる。掘り方は5×4m程度の円形に復元できる。掘り方底面に径1mの円形に掘り下げる、この部分に桶組みの井筒を据えている。井筒の残存状況は不良であるが、底面から70cmまでは痕跡が確認できる。これより上層では確認できおらず、上部は廃棄に伴い破壊された可能性も考えられる。瓦、陶磁器、土師器、鉄器、銅錢が出土する。15世紀前半～中頃に位置付けられる。

**出土遺物（第23・24図 186～228）** 186～190は井筒内出土、191～198は掘り方出土、199は検出面出土資料である。また200～219の鉄製品、220～228の鉄滓は出土位置を分けていない。

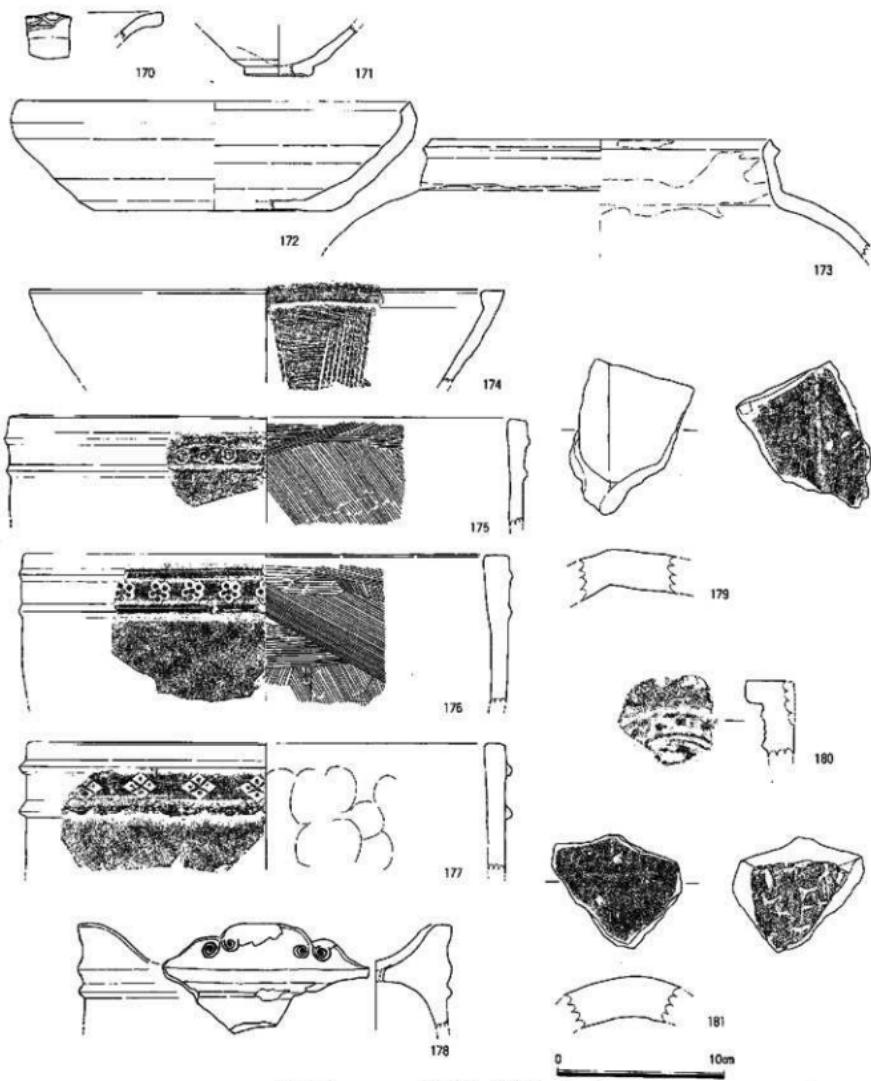
186は明代の染付端反り碗である。口縁部内外面に界線、外面には唐草文を入れる。187は陶器擂鉢である。188は巴文を有する軒丸瓦である。189は衾瓦である。凹面にはナデを行うが布目が残り、凹面にも粗いナデを行う。190は皇宋通寶（1037年初鋤）である。



第18図 SE001出土遺物実測図 3 (1/5)

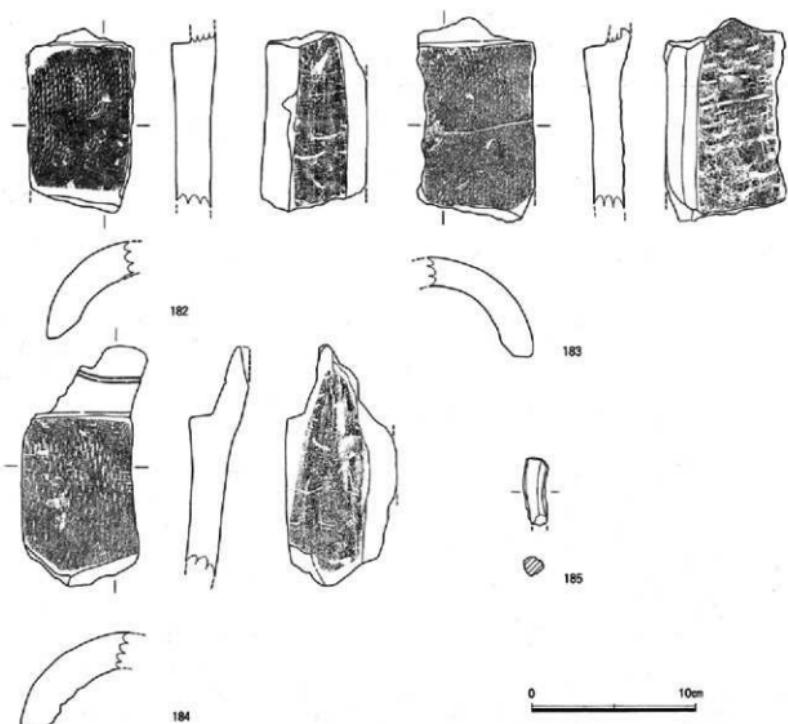


第19図 SE001出土遺物実測図 4 (1/5)



第20図 S E010出土遺物実測図1 (1/3)

191は治平元寶（1064年初鋤）である。192は青磁碗である。高台唇付きを搔き取るほかは全面に施釉する。193は陶器鉢である。194は瓦質の鉢、195は瓦質の捏ね鉢である。196は磁器小壺であろう。全面に施釉し、外面は横方向のヘラケズリを行う。外底には布目状の痕跡が残る。197・198は古代に



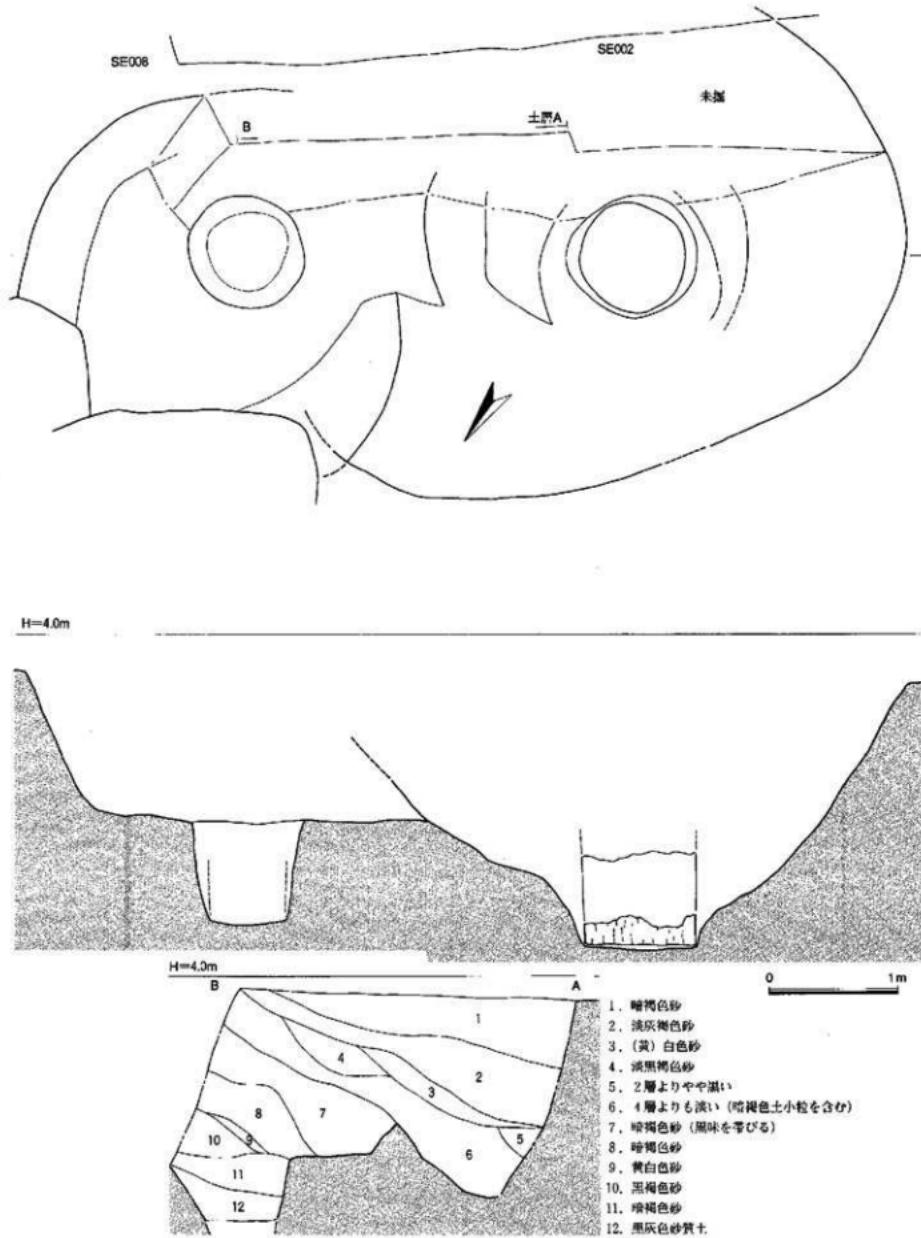
第21図 SE 010出土遺物実測図 2 (1/3)



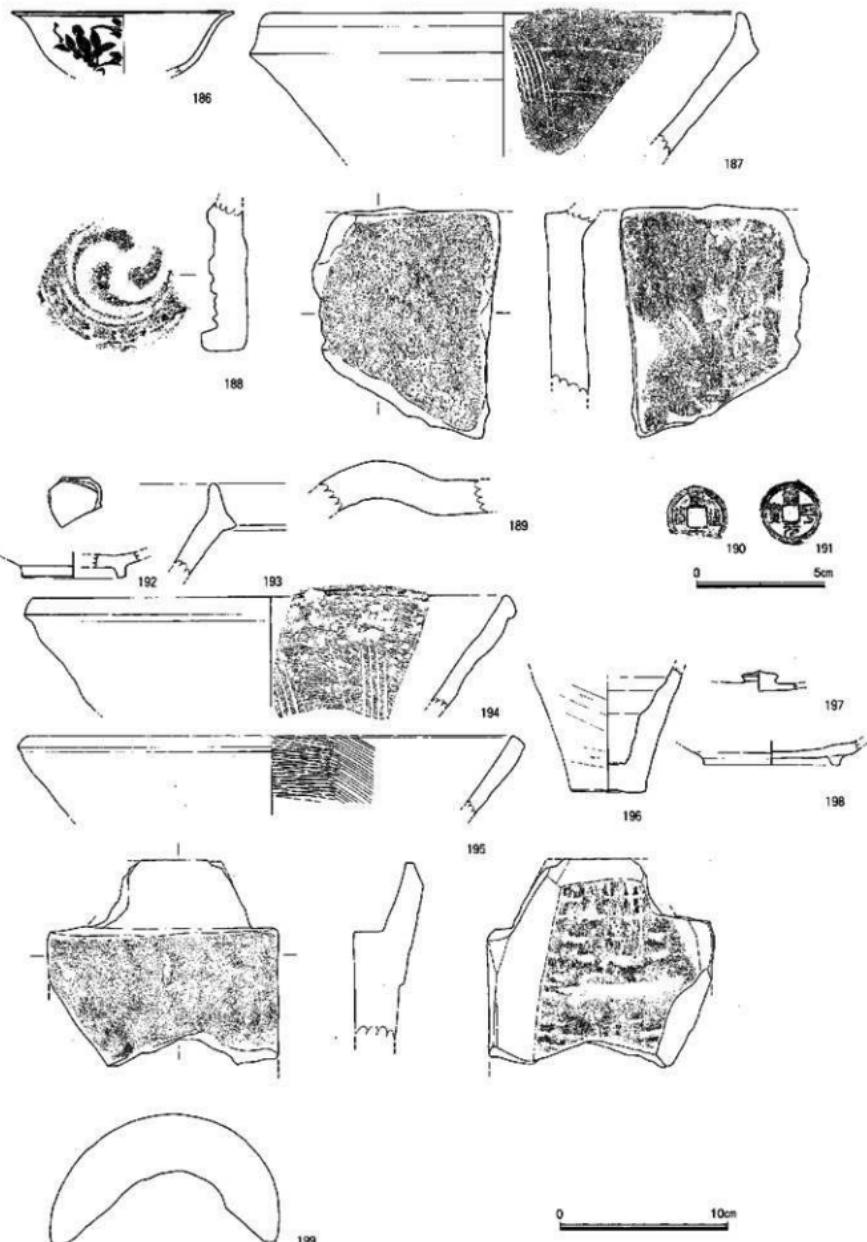
写真20 SE 002、008 (東から)



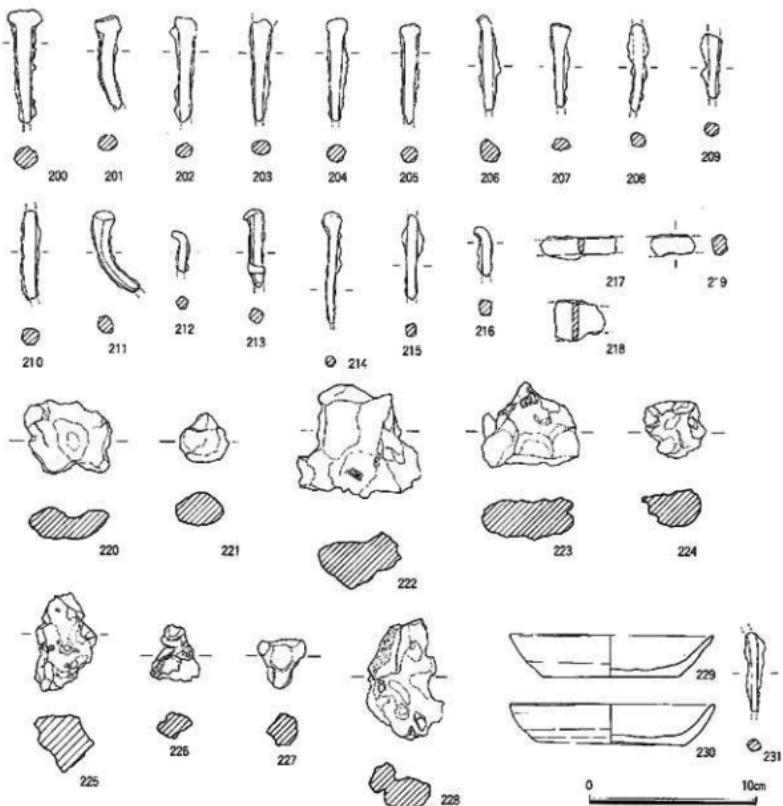
写真21 SE 002、008土層



第22図 SE002、008実測図 (1/40)



第23図 S E 002出土遺物実測図 1 (190・191は1/2、その他は1/3)



第24図 S E 002出土遺物実測図2 (1/3)

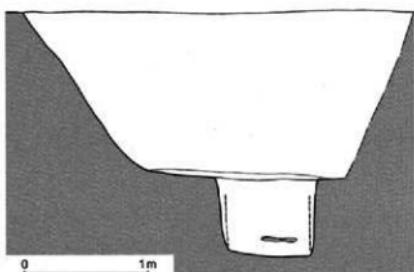
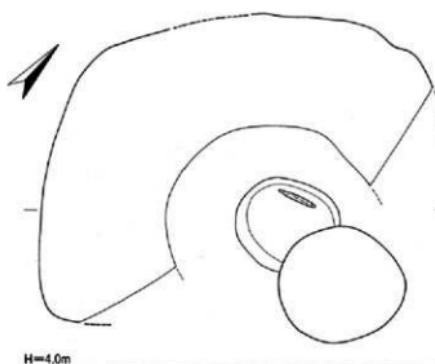
位置付けられる須恵器である。199は玉縁式の丸瓦である。凸面は縄目をナデ消し、凹面は布目と縄目を粗くナデ消している。

200~216は鉄釘である。217~219は鋳物で形状は不明瞭であるが、扁平な刀子状の一部であろうか。220~221は現状で塊状になっているが鉄製品の鋳化したものであろう。222~228は鍛冶滓である。鍛造薄片の付着は見られず、ガラス質状のものも含まれる。

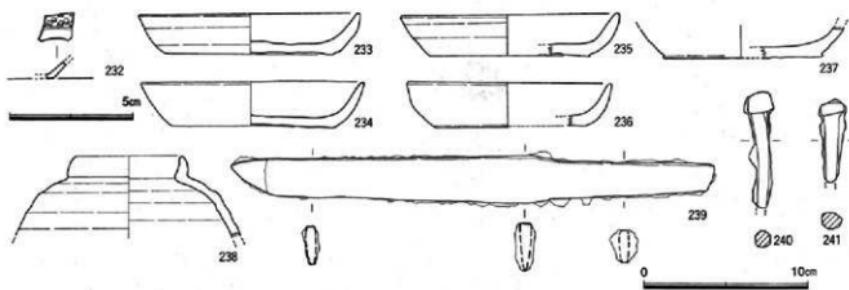
#### S E 008 (第22図)

S E 002の北東側で検出し、これに切られる井戸である。掘り方は径3m強の円形に復元できる。掘り方底面中央に径90cmの円形の掘り下げを行い、この部分に井筒を掘えたものと考えられるが、木質は遺存していなかった。当初S E 002と同時に掘り下げを行ったため、S E 008に伴って取り上げた遺物は少量であるが陶磁器、土師器破片が出土している。切り合ひ等より14世紀代と考えられる。

出土遺物 (第24図 229~231) 229・230は土師器壺である。外底面糸切りで板状圧痕は認められない。共に復元口径は12cmである。231は鉄釘である。



第25図 S E046実測図 (1/40)



第26図 S E046出土遺物実測図 (232は1/2、その他は1/3)

#### S E046 (第25図)

S E002の西側で検出し、これに切られる井戸である。掘り方は平面長方形に近く $3.3 \times 2.7\text{m}$ に復元できる。掘り方底面に径80cmの円筒形の掘り込みが行われ、この部分に井筒が据えられたものと考え

られるが、木質は遺存していない。掘り方埋土は褐色砂である。埋上の状況からS E008に先行する遺構の可能性が考えられる。井筒部分から鉄刀、土師器、青白磁等が出土している。14世紀代であろうか。

**出土遺物** (第26図) 232は青白磁皿小破片である。233～237は土師器壺である。外底面は糸切りで、口縁部は内渦気味に立ち上げる。238は陶器壺である。239は小刀である。鋒化が進行しており、形状の細部不明だが両側であろうか。ほぼ完形で全長29cm、刃幅2.5cmを測る。240・241は鉄釘であろう。

#### 4) 土坑 (SK)

##### S K011 (第27図)

調査区北側端で確認する。周辺に暗褐色砂が広がっており、これを除去すると同じ埋土でSK011・118等が確認できた。平面1.5×1.2mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ45cmを測る。遺物は少量で土師器・須恵器・陶器破片が出土している。

##### S K012 (第27図)

調査区北東端で検出する。当初切り合うSK014との関係が不明確なまま掘り下げを行い、切り合った関係は不明となってしまった。上面径1.2mの略円形土坑で検出面からの深さ70cmを測る。底面径は50cm程度である。埋土は上層(1層)灰褐色砂質土、下層(2・3層)暗褐色砂質土・淡褐色砂でSB003等の15～16世紀代の遺構と似る。出土遺物は瓦が主体で、残りは土師器壺・皿類である。陶磁器類は数点のみである。

**出土遺物** (第28図) 242～245) 242は龍泉窯系青磁碗である。高台内面まで施釉し、内底に目跡が残る。243は完形土師器壺である。外底面糸切りを行い、板状压痕は見られない。244は香炉である。脚部分にスタンプ文有する。245は軒丸瓦である。外縁下に珠文が認められる。

##### S K013 (第27図)

S K012の南西隣で確認する。長軸1.15m、短軸0.8mの隅丸長方形の土坑である。検出面からの深さは40cmを測り、断面浅皿状を呈する。埋土は灰色系の砂質土を主体とする。出土遺物には瓦、青磁、陶器、土師器、鉄器がある。

##### 出土遺物 (第28図) 246) 全長10.4cmを測る。鉄釘であろう。

##### S K014 (第27図)

S K012と切り合う土坑である。掘り方は一辺1.3m程度の方形に復元できる。検出面からの深さは60cmを測る。埋土はSK012と同様である。青磁、白磁、染付、土師器、鉄器、鍛冶滓が出土し、瓦類は見られない。

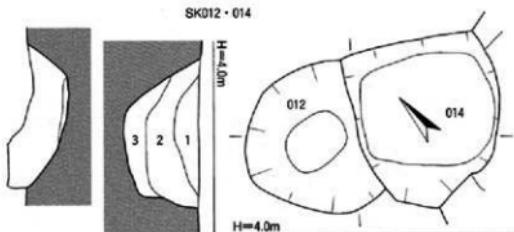
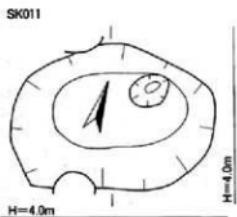
**出土遺物** (第28図) 247～252) 247は染付碗である。248・249は白磁である。250・251は鉄釘である。252は鍛冶滓であろう。鍛造剥片の付着は見られない。

##### S K016・017 (第29図)

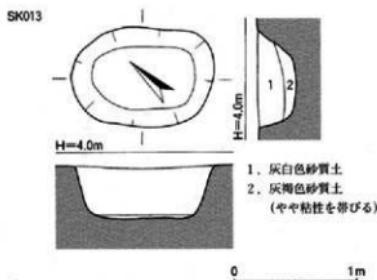
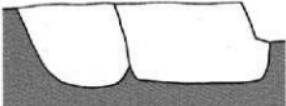
調査区西側で検出する。周辺のかく乱等のため形状が不明瞭となっているが西側に平坦面を有する円形に近い形状の土坑であろうか。当初016・017に分けて考えていたが、埋土が同一であることや形状がSK018に似ていることなどから一連の遺構とすることとした。埋土は褐色砂である。出土遺物は少量で凹凸面ナデを行う瓦破片1点のほか土師器・須恵器小破片のみである。陶磁器類は出土していない。

##### S K018 (第29図)

調査区中央南西側で検出する。長軸3.3m、短軸2.4mを測る隅丸長方形土坑である。北西半部分は検出面から50cmほど掘り下げて底面はほぼ平坦である。南東半は更に90cm程長方形土坑状に掘り下げ



1. 灰褐色砂質土  
(粘性をもつ)
2. 暗褐色砂質土
3. 淡褐色砂



0 1m

第27図 SK011、012、013、014実測図 (1/40)



写真23 SK012、014 (北から)



写真24 SK013土層

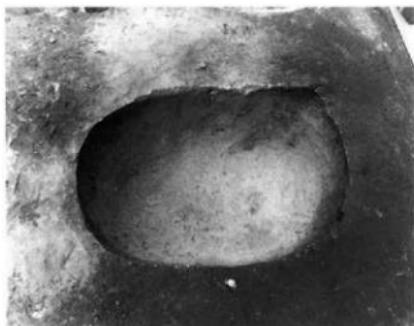
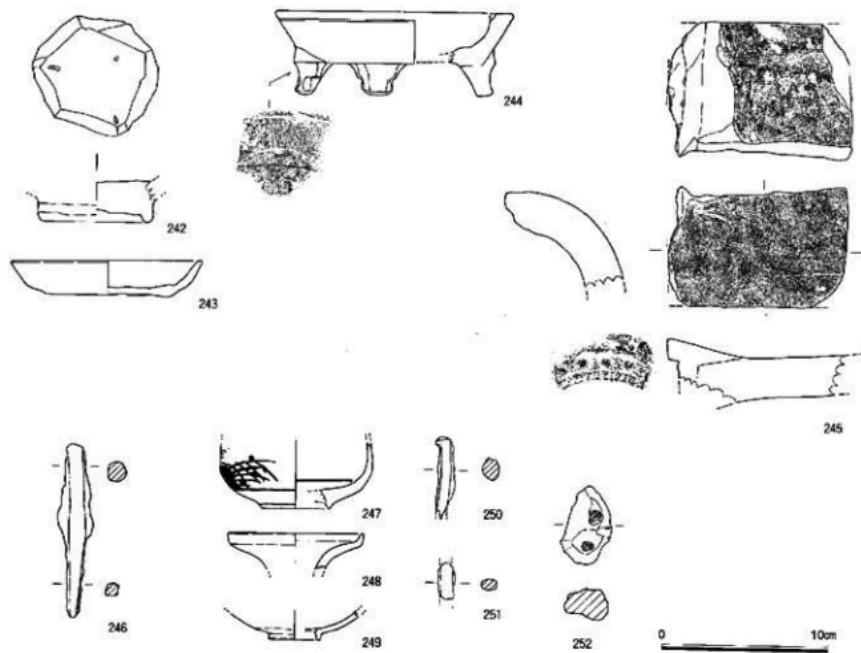


写真25 SK013 (西から)



第28図 S K012、013、014出土遺物実測図 (1/3)

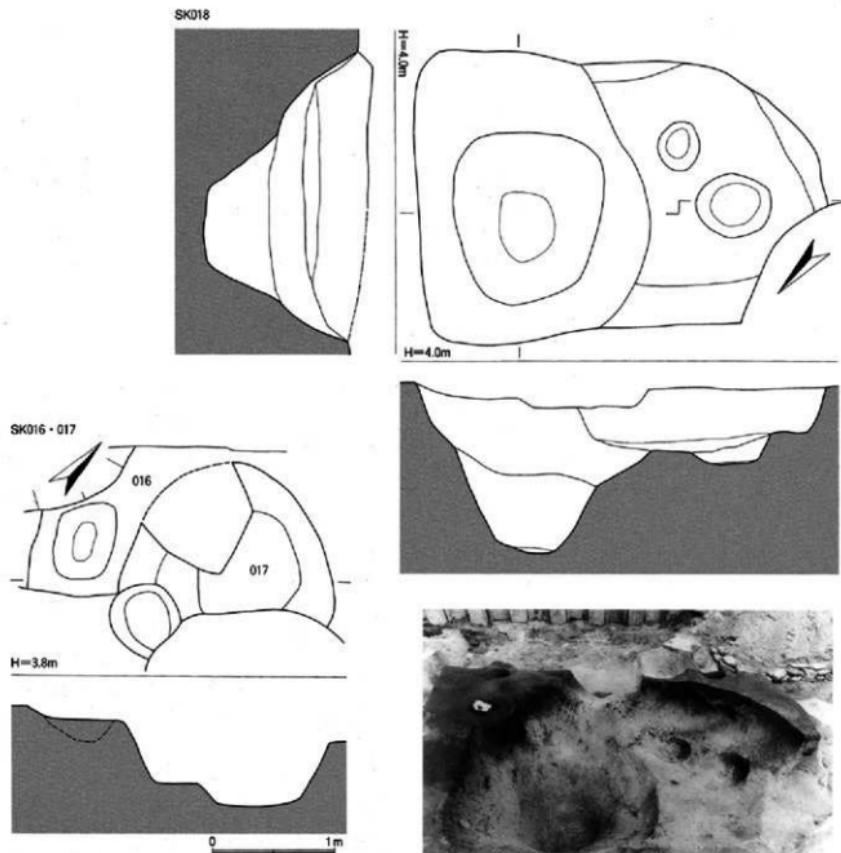
ている。埋土は検出面から50cmは灰褐色砂質土で、これ以下の掘り下げられた部分は暗褐色砂～黒褐色砂である。出土遺物には染付・青磁・白磁・陶器・瓦少量・上師器・須恵器が主体で認められる。その他鉄釘が多く見られる。

**出土遺物 (第30図)** 253は口禿げ白磁碗である。外面錫蓮弁を刻み、内面には印花文を有する。254は基筒底の青磁である。255は土師器壺である。外底糸切りを行い板状圧痕を有する。256は陶器である。内面におろし目を有する。257は瓦質鉢である。溝文のスタンプを行う。258は巴文の軒丸瓦である。259は上げ底の弥生土器破片である。260は青銅鏡の破片であろう。261～272はいずれも錫化が進んでいるが鉄釘と考えられる。

#### S K020 (第31図)

調査区中央で検出する。S B004・S K021に切られる。長軸1.8m、短軸1.05mを測り、均整の取れた長方形を呈する。底面は南西側に向かって傾斜する。埋土は暗褐色砂を主体とする。埋土から5点の鉄釘が出土し、形状から埋葬遺構の可能性が考えられるが、副葬遺物は認められない。

**出土遺物 (第31図)** 273は青磁碗である。内外面に片彫りによる施文を行う。274・275は土師器壺である。外底糸切りである。276は布留式甕である。上半1/5程の破片であるが、内面～破断面に赤色顔料が付着する。蛍光X線分析を行ったところ鉄分が強く認められ、ベンガラの可能性が考えられる。破断面にも付着していることから、破損後に椀状の容器として使用されたものであろうか。277～281は鉄釘である。



第29図 S K016、017、018実測図 (1/40)

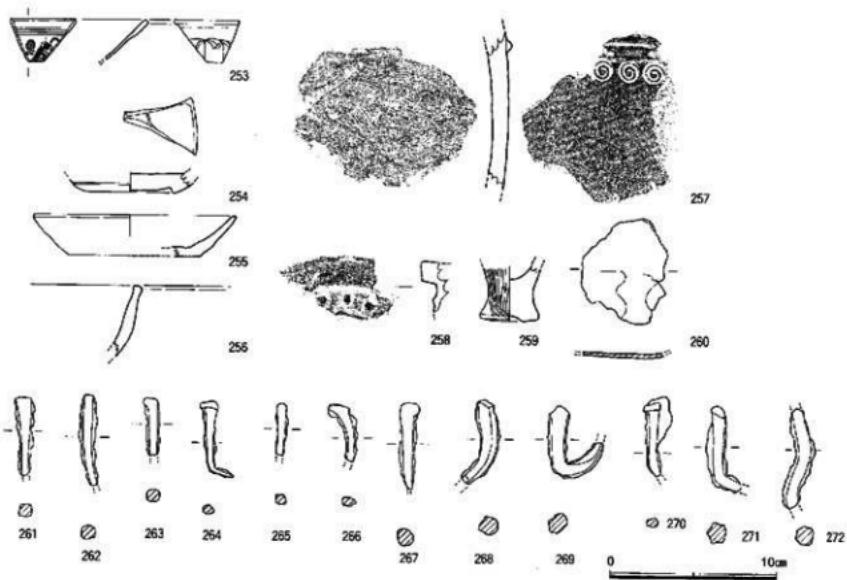


写真26 S K018 (東から)

#### S K021 (第32図)

調査区北側で検出する。1.3×0.9mの長円形を呈し、底面にはピット状の掘り込みを有する。埋土はS B003に類似し、位置的にもS D024の延長筋に位置している。建物に伴う柱穴の可能性も考えられる。遺物は少量で白磁、土師器、鉄釘等が出土する。

出土遺物（第32図）282は内面に花文を有する白磁である。高台置付まで施釉する。283は外底面ヘラ切りを行う土師器壺である。284は鉄釘である。



第30図 S K018出土遺物実測図 (1/3)

#### S K030 (第32図)

調査区中央東側で検出する。2.5×2 mの隅丸長方形に近い形状に復元できる。埋土はレンズ状に堆積し、上層の黒色砂のみから遺物が出土している。尖端しづる遺物はないが古式土師器、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土しており、古墳時代後期の十坑の可能性が高い。

#### S K034 (第33図)

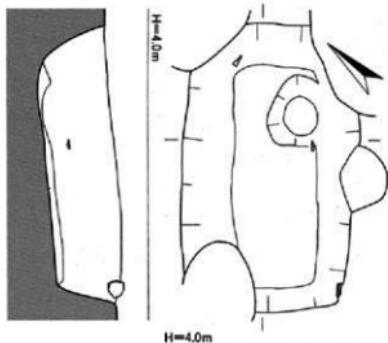
調査区中央北西端の矢板付近で確認した。搅乱等で形状は不明だが掘り込み内に馬の骨が認められる。現状でも3 m四方の範囲に散乱するように広がっている。遺存状態も不良で遺構の性格については不明である。その他土師器・須恵器・瓦・青磁が少量と楕円形鍛冶滓1点が出土する。巻末に付録として星山氏による動物遺体観察を掲載しているので参照いただきたい。

**出土遺物 (第33図)** 285は青磁碗である。高台外面～豊付きまで施釉する。外底面に人名墨書きがある。286は平瓦である。凹面布目、凸面繩目が残る。287は楕円形鍛冶滓である。

#### S K039 (第34図)

S K034の下位で確認する。搅乱に挟まれた間に淡褐色砂の堆積が認められた。北西方向に向かって階段状に深くなっている。それぞれの底面は比較的平坦である。複数土坑の切り合の可能性も考えたが、埋土に違いはなく、現状では一連の掘り込みと考えられる。白磁、瓦、土師器等小破片がみられ、掘り込み底から須恵質の捏ね鉢が出土している。13世紀代のものであろうか。

**出土遺物 (第34図)** 288は白磁碗である。内面に圓線が1条施される。高台外面まで施釉される。289は土師質の楕である。内面は磨き状に粗いヘラナデを行う。290は須恵質の片口鉢である。口縁部内面に煤が付着する。291は平瓦である。凸面に斜格子文が残る。292は鉄釘であろうか。



1. 黒褐色砂
2. 黒味を帯びた暗褐色砂
3. 暗褐色砂
4. 淡褐色砂
5. 哈褐色砂

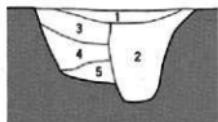
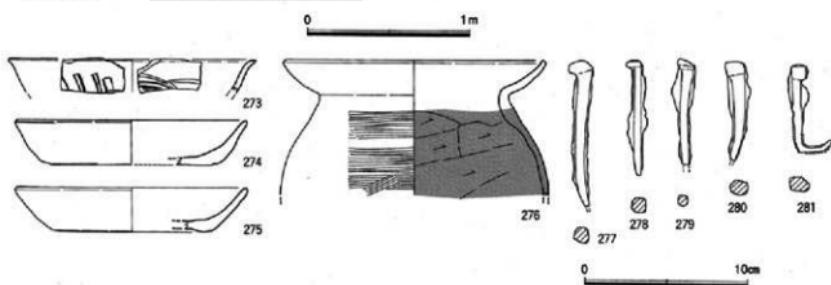


写真27 SK 020 (南から)



写真28 SK 020土層

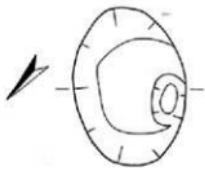


第31図 SK 020及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)

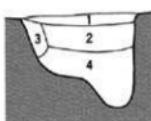
#### SK 043 (第35図)

調査区中央南東側で検出する。1.8×1.5mの方形土坑である。検出面からの深さ60cmを測り、底面は平坦である。埋土は上層暗褐色砂、下層褐色砂である。土師器・須恵器が出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

SK021



H=4.0m



1. 灰褐色砂質土
2. 暗褐色砂
3. 淡褐色砂
4. 2層より黒味が強い



写真29 S K021土層

SK030

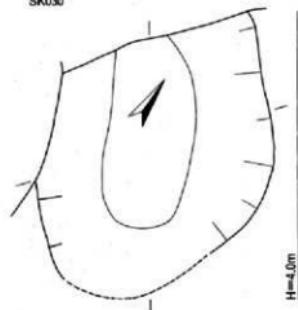
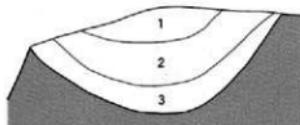


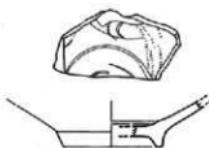
写真30 S K030土層

H=4.0m

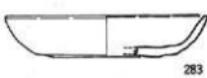


1. 黒色砂
2. やや暗い褐色砂
3. 淡褐色砂

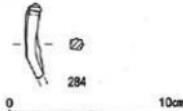
0 1m



282



283



0 10cm

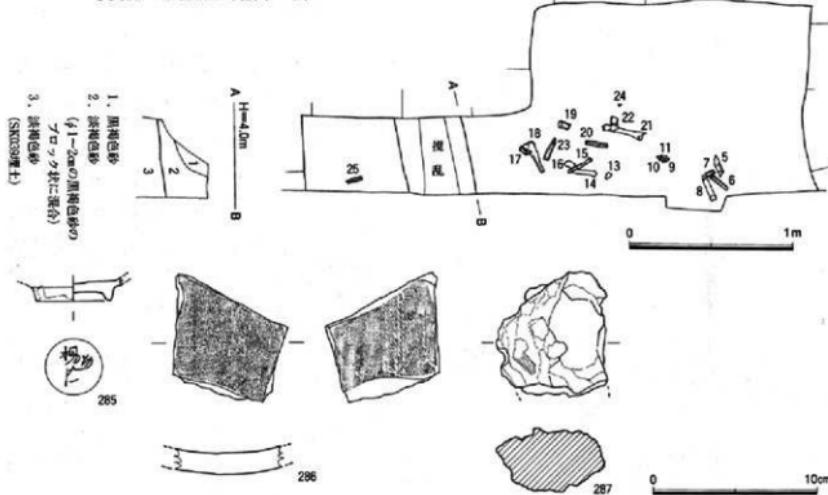
第32図 S K021、030実測図及びS K021出土遺物実測図 (1/40, 1/3)



写真31 SK 034 (北西から)



\*数字は付属層位中のRを  
付して取り上げたもの。  
※R-12はR-9-11層出土



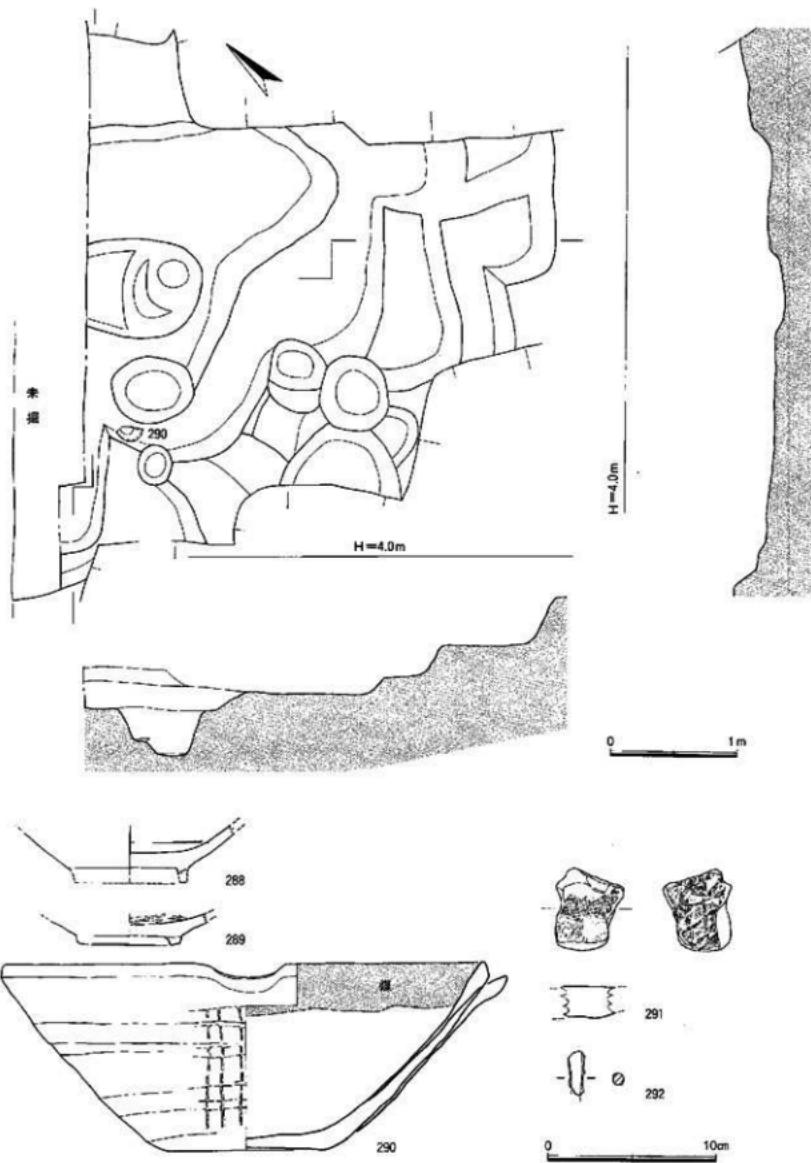
第33図 SK 034 及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

**出土遺物 (第36図 293~296)** 図示したものはいずれも須恵器である。293はかえりを有する蓋である。294~296はかえりを有する坏身である。294・295にはヘラ記号が残る。

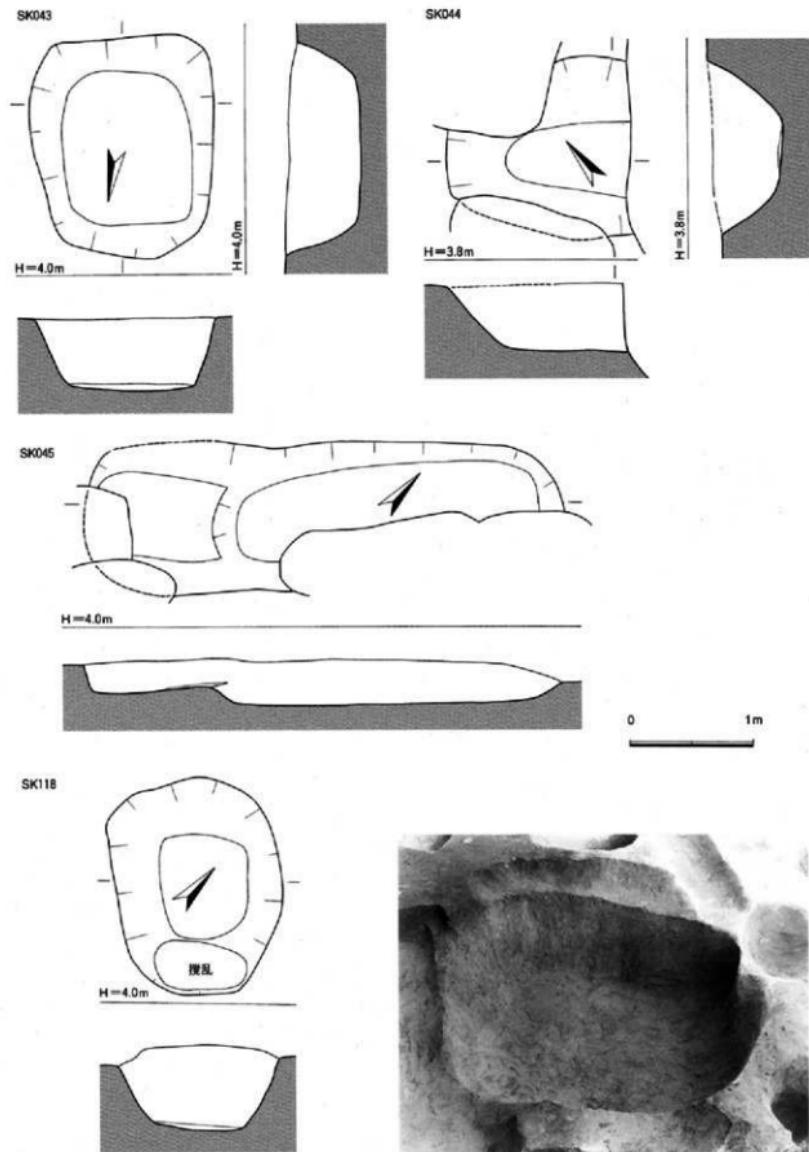
#### S K 044 (第35図)

調査区南西側で検出する。現状では幅1.4mで、長軸方向は2m強に復元できる。隅丸長方形の土坑であろう。底面は平坦で均整の取れた掘り方となる。埋土は上層暗褐色砂、下層褐色砂である。出土遺物には古式土師器のほか土師器・須恵器小片が出土する。古墳時代後期の遺構と考えられ、SK 043に類する造構であろう。

**出土遺物 (第36図 297・298)** 297は精製土器の口縁部である。色調は明赤褐色を呈し、内外面に

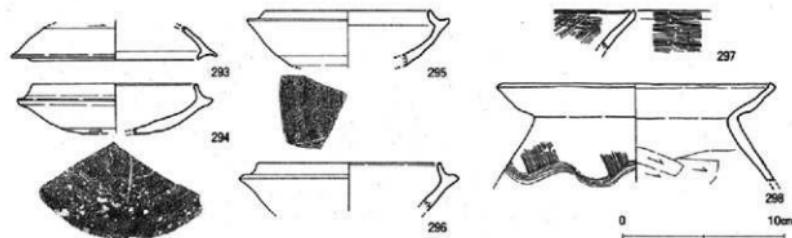


第34図 SK 039及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

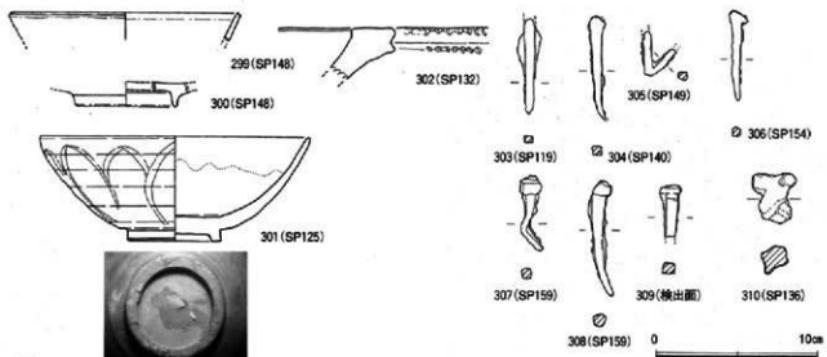


第35図 SK043、044、045、118実測図 (1/40)

写真32 SK043 (東から)



第36図 S K043、044出土遺物実測図 (1/3)



第37図 その他の出土遺物実測図 (1/3)

細かな磨きを行う。298は布留式甕である。口縁端部を内側につまみ出している。

#### S K045 (第35図)

調査区北側で検出する。長さ3.9m、幅1mの平面長方形土坑である。西側に平坦面を有し、東側2/3は一段深くなる。底面は共に平坦である。埋土は褐色砂である。出土遺物は土師器の小破片が数点のみで時期不詳であるが、埋土の類似性などからSK043・044と同じ古墳時代に位置付けられる土坑の可能性を有する。

#### S K118 (第35図)

S K011の北隣に位置する。1.8×1.3mの隅丸方形に近い土坑である。検出面からの深さ70cmを測る。埋土は暗褐色砂で、出土遺物は土師器・須恵器の小破片が10片程度認められるのみである。形状はSK043等に似るが時期は不明である。

#### 5) その他の遺物 (第37図)

299は口禿げの白磁である。300は青磁碗である。高台置付き輪を剥ぎ取る。301は丸みを帯びた蓮弁を有する青磁碗である。外底面に墨書が行われるが判読不能である。302は弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる壺口縁部である。303～309は鉄釘である。310は暗紫色を呈するガラス質滓である。

## 付編 博多128次出土動物遺体

尾山 洋 (福岡市教育委員会)

動物依存体は調査区北側の砂丘上に堆積した茶褐色土層中から出土した。調査時の観察ではウシ・ウマ類の大型哺乳類で骨はいずれも連結しておらず、散乱した状態で出土している。今回骨の同定を行ったが骨の遺存状態が悪く同定できなかったものが多い。

同定の結果 いずれもウシ・ウマと思われる大型哺乳類の骨で種が判明したのはいずれもウマである。出土した部位は上下顎の臼歯と四肢骨が出土している。歯は上下臼歯と切歯が出土している。椎骨や肋骨が出土していないことから解体され頭蓋骨と四肢骨が廻棄され肋骨は肉がついた状態で持ち去られた可能性も考えられるが、骨の遺存状態からすると消滅した可能性も高いと思われる。四肢骨は表面全体にネズミによるものと思われる引っ掻き痕がついておりカットマークの有無は不明である。

造構	層位	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切歯	火熱	備考
011		哺乳類	ウマ	臼歯 (上顎)			外周欠損	不明	不明	不明	歯冠高4.35cm
018	上層	哺乳類	ウマ	臼歯 (上顎)		小片		不明	不明	不明	歯冠高4.38cm
025-底	a	哺乳類	ウマ	臼歯 (下顎)	右	P3-M2のうちの1本	外周欠損	不明	不明	不明	歯冠高5.3cm
034	R 25	哺乳類						不明	不明	不明	
034	R 11	哺乳類						不明	不明	不明	
034	R 13	哺乳類						不明	不明	不明	
034	R 2	哺乳類	ウマ	臼歯 (下顎)	左	P4?	外周欠損	不明	不明	不明	歯冠高6.03cm
034	R 4	哺乳類	ウマ	臼歯 (下顎)	左	M3	外周欠損	不明	不明	不明	歯冠高6.02cm
034	R 4	哺乳類	ウマ	臼歯 (下顎)	左	P3-M2のどれか	外周欠損	不明	不明	不明	歯冠高6.71cm
034	R 1	哺乳類	ウマ	臼歯 (上顎)		細片		不明	不明	不明	歯冠高4.59cm
034	R 19	哺乳類	ウシ・ウマ	前脛骨		遠位部関節面?		不明	不明	不明	
034	R 18	哺乳類	ウシ・ウマ	前脛骨もしくは脛骨				不明	不明	不明	
034	R 16	哺乳類	ウマ?	指骨 (基節骨)		近位端欠損		不明	不明	不明	ネズミひっかき痕多い
034	R 5	哺乳類	ウシ・ウマ	上腕骨		遠位部	側面	不明	不明	不明	ネズミひっかき痕多い
034	R 9	哺乳類	ウマ	切歯		齒茎部		不明	不明	不明	
034	R 10	哺乳類	ウマ	切歯		頸側のみ		不明	不明	不明	
034	R 12	哺乳類	ウマ	切歯 (上顎)	左?	I1・I2か	頸側のみ	不明	不明	不明	2本分
034	R 20	哺乳類		長幹骨		基幹部のみ		不明	不明	不明	ねじれによる引っ掻き痕多い
034	R 6	哺乳類		長幹骨		小片		不明	不明	不明	ネズミひっかき痕多い
034	R 15	哺乳類		長幹骨		細片		不明	不明	不明	ネズミひっかき痕多い
034	R 14	哺乳類	ウシ・ウマ	長幹骨		両端欠損		不明	不明	不明	
034	R 17	哺乳類		長幹骨		細片		不明	不明	不明	
034	R 8	哺乳類	ウシ・ウマ	長幹骨		基幹部		不明	不明	不明	
034	R 7	哺乳類		長幹骨		小片		不明	不明	不明	
034	R 22	哺乳類		長幹骨片				不明	不明	不明	
034	R 23	哺乳類		長幹骨片		細片		不明	不明	不明	歯冠高2.3cm
034	R 21	哺乳類	ウマ	脛骨		遠位部欠損	細片化	不明	不明	不明	
039		哺乳類	ウマ	臼歯片				不明	不明	不明	
36-1		哺乳類	ウマ	歯片				不明	不明	不明	
不明		哺乳類	ウマ	臼嚙片				不明	不明	不明	

---

## 博多 89

—博多遺跡群第128次調査報告—

2003年（平成15年）3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株富士印刷社

福岡市東区箱崎5丁目6-45

---